353
特11
676

面白叢談

瘦々亭
骨皮道人著

東京共隆舎

091604-000-9

特11-676

面白叢談

瘦々亭　骨皮道人／著

M24

DBO-0050

骨皮道人の略傳

骨皮道人姓は源氏名は清盛通稱を桃太郎と云ひ父を武藏坊辨慶と云ひ母を小野小町と云へり道人の其長子なり是より先き辨慶の未だ年若きとき織田頼朝の厄役を勤めて月給五千石を食む其當時同家の局に名薩おる者あり義經これを岡惚する事久をけれども生憎それ機會を得ず只空しく山間に在て塵外の風月を娯しむのみ然るに天道は人を殺さず一日お菊が皿を抱いて御殿より出來るに會す帥直以爲らく是れ天より與へ賜ふの好機會なりと即

ハち女裝して敵軍に紛れ込み一首の古歌を記をて之を送る其歌に曰く、我國れ梅の花とハ思へども何とて松ハつれなかるらんと然れども尾上ハ元町人の娘なゞら鈴木主水ま頼まれたる大切の事もあり且つハ妹信夫と親の讐を討んと欲する大望を懷くの身なれハ固く辭して動せぎ曰く妾の身体を自由に爲んとならバ宜しく妾の身体の目方ゑど黄金を積で御座んせと杵もて鼻を縛るの挨拶に腹ハ立ども詮方なく目指ハ羽柴たゞ一人と女房れとわれ手を取て信田れ森へ逃るに當り雌龍の鍬形を置き土

産として五條坂の邊りに棄兒を爲す是れゞ即ハち今の骨皮道人なり(一説に巴御前ゞ五臓圓の看板を夢みて孕む故に骨皮道人と名くと云ふ者あれど夫ハ嘘の皮にして信ずるに足らず)道人已に棄兒にせられ何したら餘勘平と思案の最中通り掛りしハ幡隨院の助六にて此人頗ふる雄氣ありヲ、泣な抱て遣うと小腋にかゝ㋣安宅の關所も難なく通り鳥も通はぬ玄海灘をイザ見にでんせ東山鳥ハ立ども跡を濁さず故郷山ケ崎村をさゞてぞ出行たり古人曰く窮鳥懷ろに入る時ハ却ッて猫を嚙むと宜なる哉

道人ハ漸く宗清の爲めに助けられて道成寺に入り居るを數月時に竹部源藏なる者あり道人の首を討て鶴千代君の身替に立んと欲す道人之を聞て以爲く忠せんと欲すれバ忠ならず孝せんと欲すれバ孝ならず飲だ酒なら醉ざアなるめへ醉た酒なら醒ざアなるめへ人目に掛らぬ其中にヲヽさうぢや〳〵と只一騎れ半を脊中に長右衛門落つく先ハ九州相良時延るほど不覺のもと用意の乘物是れへ是へと將に湊川に赴らんとするに當りテーイ〳〵親父どのと扇を揚て靡ねく者あり曰くヲヽ珍らしや加藤

正成魚心あれど水心花降りゝる仲の町我子の平三であつたかと拔ば玉散る氷の刄金子百兩稻川殿へ御贔負よりとの災難に城を枕に討死せんと鋭き眼の雄者と雄者奈良の旅籠や三輪の茶屋遣ひ果して二歩殘る金より大事ぁ木の下藤吉其處動くなと突ッ込む手練順緣逆生俱に菩提逃る敵きに目な掛そお家に仇する大鼠この小平太ゲ一生の誤まりマア〳〵待つて下さんせと袖に取りつく初花姫耳に も掛けぢ音近は比叡山へと立籠り面壁九年の艱難苦行時惟れ慶長三年柿八年柚は九年で花が咲くの

時節にして道人漸やく九歳名を石童丸と改ためたり既でにして以爲へらく今まや英雄四方に蜂起し四國は薩摩守忠度あり九州にハ西郷隆盛あり赤ン辨慶屁でも景清今にして種を蒔ずんを鴉にホヂクラれて權兵衛の悔あらんのみと自ら鞍馬山に入つて佐々木岸柳に劍術を學ぶ然れとも頭を打られむ甚た痛し以爲へらく劍は一人の敵なり學ぶに足らもと去て弘法大師に就て書法を學ぶ然れ共蚯蚓の行列にして旨く出來ぎ以爲へらく書ハ姓名を記するに足る敢て學ぶべき業に非ずと又た去て武田信玄

に仕へんを請ふ蘭丸これを見て曰く汝ぢの顔狸に似たり身必らず眞黑ならんと賜ふに千鳥の香爐を以てを道人是を大岡越前守に內通し本多平八郎と途に車駕を奪はんと欲して能はず即ち唐崎の松を削つて一詩を記す曰く「天勾踐を空うする無くんば囊中自ら錢有り」と後之を見る者世に馬鹿あるを知ると云ふ既にして桶狹間に小金井小次郎の喧嘩あり道人是が先陣を張て秀郷の爲めに追まくられ止を得ずして一時油屋の丁稚とあり終にお駒と夫婦約束を爲を是れ道人が浮名を流せし初めあり夫よ

り紀文大盡と稱せられて吉原を跋扈し或ひは福岡貢と名稱て伊勢の妓樓に十人切の乱暴を演ド或ひは瓢簞計りゲ浮物に非ざるを知ずして艤七に恥をわゝされ或ひと唾壺より蛇の出る所以を悟らずして時次郎ヨ浦里を横取せられ其外難だ艱だと愚圖しながら神武天皇即位の元年より鶴は千年龜は万年の齢を經て終に今日の有樣に至る是れ骨皮道人の略履歷なり

時に嘘八百年二月三日

骨皮道人自記

面白叢談目録

○傳授の尻馬
○一席はなし
○金儲けの新案
○醫者は心切なるを要す
○廣告の功能及び工夫
○日本と西洋との反對
○好時節の戯奇文
○偽物の害
○夫婦の關係
○長尻の人に告ぐ

○賣藥の功能
○德利とれ考へを乞ふ
○花見談語
○ブラ〳〵
○五月の鯉
○花骨牌の流行
○娼賣替のよしあし論
○娼妓は代つて廢娼主義の旦那に與ふるの書
○書物は讀むべし讀まれる勿れ
○昔し話し

○金借の沿革
○金貸諸君に一言す
○男女の手紙を同一にすべし
○旅人宿の弊害
○學者と商人
○飛鳥川
○繪畫の必要
○學者の不品行
○理髮床に迷ふ
○自負心の事業を達するの基
○轆轤首の話し

○漫筆物が世に出たよ就て
○虎列刺の豫方法
○東京人の物好き
○美人とは如何なる者ぞ
○人を使ふ者の心得
○奉公人諸君よ
○一事一業を貫くべし
○多辨の一針
○物小なりとて侮るべからず
○芝居を觀て理屈を云ふ勿れ
○鏡はおし

○遺言の事
○命の洗濯
○商人は懸引
○商業家よ改良を望む數件
○子供衆のお耳を拜借

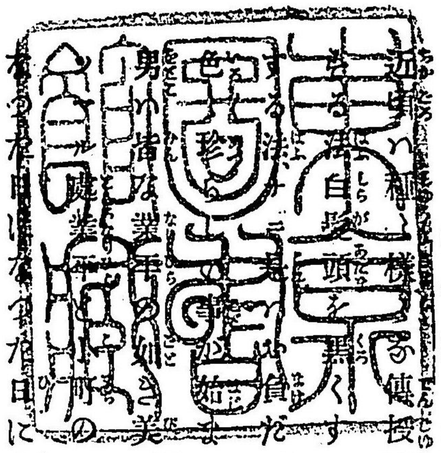
特11
676

面白叢談

骨皮道人著

◎傳授の尻馬

近頃い種〻様〻の傳授事を公けにするのが流行で色の黒いのを白くする法、自髪頭を黒くする法、低い鼻を高くする法、大きなお尻を小さくする法、色珍らしく見せる法、負が併し世の中が開けて智識が進歩して來るとなるゆゑ此の分でモウ十年も押て行うものなら男子となり女い皆な小町の如き美婦人となり男が皆な業平の如き美男子となり女が皆な小町の如き美婦人となる



二種に煎じ詰ッて仕舞か知らないが若しさうなる日には食た日に成ッて見ると只困るのい此骨皮道人ナぜならば是までい他に道人の如き美男子い無かりしゆゑ我獨り造化より得た賜物と誇り且つ威張ッて大抵な女い先方からお膳を据て來ても容

易にん箸を取らざりしが世間の怪怪面御丹珍漂碌玉ノッペラ坊までが悉く美男だの色男だのとなつて見ると折角特別に拵へて貰ッた骨皮道人の美貌麗質もグッと直打が下れバなり、イヤ餘計な常談ん扨置て道人も傳授流行の尻馬に乗て一の秘傳を打明る事あり、と云つたら又骨皮めが出放題を云つて人を擔ぐのかと思召す人もあるか知らないがイヤ今日バかりん決して擔ぐの欺すのと云ふ譯よん之なく全く正眞正銘嘘僞んりのない秘密種あれバ其ふ積りにて御覽を乞ふ尤も近頃の流行風に行と一法に付て二圓とか三圓とか相當の御傳授料を申し受べきあれども其處ん御懇親の間柄ゆゑロハと致して置くべし(但し下さるならバ嫌とん云んず)ソコで其秘傳とん如何なる秘傳かと云ふに寢小便を止めさせるの傳授即ん ち是あり、抑々この寢小便と云ふ奴ん啻に四五歳の小兒にのみ限らず甚だ敗に至つて十四五歳の大野郎にても時々滿腔と寢衣をビッショリにしてオヤ〳〵是ん大變と驚ろく者あり世間の人ん此寢小便を以て一種の病氣と思ッて居れども是ん病氣に非ずして習慣なり其証據にん中等以上にして能く尻始末に手の行屆く家の小兒又たん下等社會にても母親が寄麗好にて養育たる小兒ん決して寢小便をする事なし故に子供が寢小便を乘れるのを不潔いと思ふならバ赤ン坊の時より母親が能く氣を附けて襁褓を度々取替へ乘流し放流しに仕て置ぬやうにすべし左すれバ其の清潔が習慣となるがゆゑに自ら不潔を厭ふて寢小便あるべんせぬあり而して已でに成長したる者の寢小便を治すにん成るべく食物の度を定め殊に夕飯ん常食より扣へ目にして餘り湯茶を呑まぬやうにし又昼間にても小便に行度いのを我慢の出來るだけ二時間でも三時間でも我慢し何うしても我慢が出來ないやうよ成れバ仕方なしに放出す位ゐにして膀胱に耐忍の習慣を附れバ平癒する事必らず請合あり已に此の療法を傳授して寢小便の治りし者道人の知人中にも澤山あれバ

若し寢小便にて困る人有ば此法を施して御覽じろ決して虛言や常談でハ御坐らぬ、エヘン道人の傳授とアすい先づ大略書の如し

◎一席ものがたり

道人ハ生れつき痩ッ保痴た男でみづから名乘る通り骨と皮とでヤットコサと釣合をとつて居るやうなヘナ〳〵人間で御座いますが此の痩ッ保痴た骨皮道人にハナト不釣合な女房デハナイ一人の友達が御座います此の友達と云ふのが又た大變な大男でこれを道人の身体に比較て見ると丸で奈良の大佛と淺草の觀世音とほどの大違ひで御座います(マサカ)ソコで其の大男ハ物身に智惠がまハり兼るのだか何だか平生に身体の壯健なのを鼻にかけて然も自慢らしく食物も亂暴な飲物も亂暴な負に少しぐらゐ頭痛がしたり腹が痛んだりする事があつても藥を一服呑うでもなし大威張に威張て身体を粗末にして居りましたが人ハ病の器なりでサウいつまでも威張で居られるもので

ハ御座いません爾斯する中にインフルエンザと云ふ舶來の風の神に躍り込れたから奴子さんハ驚ろいたの驚かないのでハない花戰の眞最中へサアベルが飛こんだよりハ猶一層の大驚きでソレ頭へ鐵瓶をはめて呉ろヤレ胴中を才槌で打て呉ろなどと丸で桶屋の職人が狂印におつたやうな大騒ぎで御座いましたが夫もマア二三日の事で追〳〵に熱度も減じ頭痛も去てたゞ時〳〵コン〳〵と咳が出位ゐな事になつて來るとサア奴子さんハ又候威張出して何だ人ハ流行感冒ハ怖いものだの痛氣と寸白が一所に出て來たのと大業に騒ぎ立るが此樣な事あら世界中のインフルエンザを自己一人で呑負てやつてもタカの知れたものだと醫者のとめるのも聞入れずに髭を剃たり湯に這入たり或ひハ處々方々を遊び歩行て居るとドッコイさう旨くハ逃がさないと風の神の方でも反對の位地に立たから又々元の杢阿彌お目に止れバ逆モドーリと來て殊に今度ハ初發より一際はげしくなつて頭へ鐵

箒をはめやうが胴中を才槌でブナノメさうが中々容易に風の神ゝ退散せずトウ〳〵それが爲めにお陀佛にあつたと思しめせチヤ延喜が惡い鶴龜〳〵イヤ延喜のわるい話しだが是ゝ決して人事でゝ御坐いません身体髮膚これを父母に受くと孔子様の口眞似をするまでの事ゝあく人ゝ何が大切だと云つても身体ほど世に大切なものゝありません故に少しぐらゐ身体が肥大て壯健だからとて其の壯健を恃みにして病を馬鹿にすると終にゝ河童の河流れその身体の壯健あるが爲に掛替のない生命を玉なしにするやうな事が出來いたします尤も是ゝ身体のみならず少しばかり蟹文字や譯飜書を嚙ッたからとて夫を恃みにして獅子ッ鼻をビコ付せて居ると飛でもない赤恥を搔き又少しばかり財産があるからとて夫を恃みにしてノラクラ遊んで居るとツマリ裁判所の前へ名前を書出されて執達吏の御厄介となるやうにありますから何事も御用心が第一オットどつこい人事でゝない道人もその積りで身体を大切にセッセと稼ぎませうハイ左様なら

◎金儲けの新案

商人の不景氣百姓の不作とゝ古今一様、百年前の夢の世も百年後の今日も些とも變らぬ云ひ草にて、金が儲からないと云ふのも米の出來が惡いと云ふのも、實ゝ珍らしくも何ともない話しなり、然れども世に不景氣あるゝ猶ほ人に疾病のあるが如くにして、如何に愚痴を溢すとも何樣なに泣言を並べるとも、ツマル處ゝ愚痴の溢し損泣言の並べ損あれども昨年以來の不景氣ゝ全くの不景氣なれバ此不景氣の中に何か目新らしい事を思ひ附て一握千金の巨利を得んと、甲ゝ鶏の目を張り、乙ゝ鷹の眼を剝出し、我こそ中原の鹿を生捕にして味噌汁にせんとの息込ゝ、扨ても勇ましき世の中と申すべし、ッコで道人も亦た鳶が飛ババ鳩が飛ぶ鵜の眞似をする鴉ゝ土左衛門とあるを知りながら、人間並に濡手で粟を掴み取らんと極々新案の金儲け節を發明したり、尤も是ゝ

未だ專賣も受ず商標もなし猶ほ版權も所有せざれば若し之を名法と思ッて製成せらるゝお方わらば、何方が眞似を成さるとも道人ゝ決して苦情を申さず、ソコで以て其の新案たる明商法ゝ即はち左の二三件あり

○第一金貸　一千圓でも一万圓でも金が欲いと云ふお方にゝ直樣御貸申す處で其貸與の方法ゝ例へば百圓貨て呉と云ふヤし込あれば先づ身元確實なる者五人以上の連借証に各自の家財又ゝ動産不動産物を抵當とし而して金を渡す時に元金の五割を手數料として引去り其殘金より五圓につき五十錢ヅゝの利子三ヶ月分を差引き其又殘金より抵當物取調べ諸費および印紙代筆墨料等を引去て其殘餘を貸與する方法あり尤も返濟の期日を一日でも過去りし時ゝ直ちに裁判所へ擔ぎ出して抵當物を差押へるゝ勿論の事

○第二預り金　何万圓にても何十万圓にてもお預りヤす尤も該金を預りたる時にゝ立派に印紙を張た預り証を差出し置ゝ勿論の事ながら少し年月を經れバイヤ其樣な金ゝ預ッた覺えゝない夫ゝ何かの間違ひだらうイヤ其樣お預り証おとゝ出した事ゝない夫ゝ何かの間違ひであらうと圖々く敷く搆へ込で居るかも知れず其時に及んで難の艱のと云ふ人あるとも決して取合ヤさず

○第三役員雇入れ紹介　銀行あり新聞社なりお望みの處へ紹介すべし尤も身元金として最初に百圓又頂戴し夫より五圓又ゝ十圓ヅゝの手數料を以て其休格および學力を試驗し成べく落第するやうに仕向けて落第者にゝ身元金も試驗手數料も返付せざる者とす

右の外まだ種々の新案あれども餘ゝ追て又た御吹聽に及バんと欲す諸君幸ひに利口者よ旨い事を考へ出したとお譽下さるや否や

◎醫者は心切なるを要す

元來醫ゝ仁術なりとも云ひ又た宰相とならずんバ儒醫と爲れと古人

も云われた通り仁術と云へば人を助けるのが專一なるべく又た宰相とならずんば儒醫と爲れとの意味ゝ宰相ゝ國を治めるのが役目儒者と醫者とゝ人の身を治めるのが職分ゆゑ孰れにしても國に盡す處ろゝ同じ事なれば男子と生れた以上ゝ此三ッの中の一ッに成れと云ふほどに醫者ゝ重い職分なり然るに多い醫者樣の中にゝ誠に不信切な人のあるにゝ困る第一夜中に急病人ありて駈つけ是ゝ云ふの譯で困りますから夜中に甚だ御苦勞樣でゝ御坐いますが一寸どうか御來診を願ひますと頭を下て平に賴んでもイヤ自己の家でゝ夜中の診察ゝ致さぬから此儀ゝ眞平お斷り申そと杵で鼻を括ッた挨拶よ殆んど當惑する事あり尤もお金が澤山あるから若し其樣な事を云つて强盜でも這入ッて來てゝ困るとの御用心かも知れざれども一時一刻を爭ふ病人にて態ゝ賴みに行くものを無氣に斷わるとゝ甚だ不信切の樣に思われる夫から又た今にもお陀佛に成るかも知れぬとて家內の者ゝ云ふに及ばず親類知己朋友の者まで泣の涙で看護して早く醫者樣が來て下されば宜、と切ゝ迎ひに行けば先生ゝ自家に居て碁を打の閑ありながら未だ藪の仲間入も覺束ない竹の子先生を代りに寄越されるなどゝ甚だ不信切のやうに思われる夫から又た命を助けて貰ひながら其の藥禮を拂ゝないのゝ素より病人の方で惡るいとゝ云へ實際貧乏で困る者に向つて現金で無ければ藥ゝ遣らぬとか或ひゝ藥を遣つて置いて其の病人がまだ全快するか仕ない中に酒屋か屋屋が三十日の勘定を催促するやうにサァよこせ何時勘定をする積りだイクラでも宜い總勘定が出來ないれば半金でも宜、から寄越せなどと嚴しく責附けられるのゝ甚だ不信切のやうに思われる尤も此樣な醫者さんゝ澤山にゝ無い皆仁術を定規にした信切なお方ばかりなれど若し此樣な不信切なお方があるならば何とか御改正を願ひ度もので御座るが果して醫者意承知したと仰せらるゝや否や

◎廣告の功能及び工夫

昔し商業の未だ振はざる時代に在ては今日の如く新聞紙に因て廣告するの便も無かりしが故に縱ひ如何なる有用の物品を發明するも又た如何なる精良の物品を販賣するも只僅かに所〻の四ッ辻へ張札をするか又は其近邊へ引札を撒布するかの二途に出ざりしなり尤も賣藥の如きは戯作者に依頼して其著書の文句中へ綴り込で賣ひ或ひは讀畢りの處へ廣告する等の手段もありしかと思はるれど併し是とても第一ろの書物からして販路の狹き事なれば其骨折はその功力は無かりしなるへし然るに今日となりては日々に全國へ行渡るの新聞紙あるが故に一たび是に廣告すれば北海道琉球に云ふに及ばず數千里を隔てたる外國までをも知らせる事を得べし故に若し其廣告の物品が社會の信用を得るに於ては名譽も幸福も亦た利益も皆一時に舞込み來り昨日までは貧乏神と睨みッ競をして血の涙を溢せし人も今日は

七福神の仲間入をして寶船に遊ぶも自由あり廣告の功能豈に夫れ大あらずや然れども其廣告の出し方に就て又た種々の工夫あり若し其工夫を爲さずして唯新聞紙へ廣告を出しさへすれば七福神の仲間入が出來るものと思つて居ては大當違ひあり啻に大當違ひのみならず廣告料の出し損となるあり然れば新聞紙の廣告は第一衆人の目に附やすきやうに新工夫を凝して出すこそ肝要あり而して其衆人の目につき易き樣にするには如何なる事にすれば宜しきかと云ふに是は其品にも依り又た其時にも依るべしと雖も先づ人の意表に出たる繪畫を以て注意を招くを宜しとす何となれば道人が過日當紙上に掲し述たるが如く文字は讀ざる人あれども繪畫は無筆にても判斷し易く又た小兒にても其何者たるを辨じるが故に何人たりとも此處に目を注げばあり而して第二には他人が已に工夫したる新案の眞似をすべからず何となれば古人も云へる如く先んずれは人を制し後るれば人に

制せらるゝ道理あれば他人の尻馬に乗てゝ決して勝利を得る能ゝざる者あれば有り雷に勝利を得る能ゝざるのみならず若し之を見る人に於て先鞭者の廣告と混同するときゝ恰かも自腹を切て人の利益を手傳に奥あらざれば なり世の實業者諸君よ道人の言を以て餘計なお世話と爲すなかれ

◎日本と西洋との反對

諺に曰く所替れば品替ると成はど夫に相違なし其証據にゝ東京から僅か七八里隔ッた田舍へ行ても東京の風俗とゝ丸で違ふ事あり例へば東京の婦人が若し手拭を被ッて居ても其處へ客が來れば直に之を取て挨拶をすれど田舍にてゝ客の來た時に急いで手拭を被り又た婦者の家へ行ときゝどゝ殊更に新しき手拭を被ッて行く等の反對あり然れば數千里を隔てたる西洋諸國と日本とを比較すれば万事に就て相違の廉あるゝ敢て怪しむに足ざれど其反對する事甚はだ多し是ゝ孰れが宜しきか知らざれども今その大略を擧て見れば即ち左の如し

○日本にて二階三階のある家に於て珍客のある時ゝ其二階なり三階ありへ通して待遇そるを例とそれども、西洋にてゝ高き處に登るはど粗略の取扱ひと見做す

○日本にてゝ古來より帽子を被ッて挨拶そるを禮とすれども西洋にてゝ帽子を脱そるを禮と爲す

○日本にてゝ人の妻たる者ゝ成べく言の寡きを宜しとすれども西洋にてゝ成べく面の皮あつくべチャクチャと饒舌繰を交際に熟したる者と貴ぶ

○日本の娘ゝ素直にして優敗を貴び又た十六七歳にも成れば成べく男子に近付ざるを宜しとすれども西洋にてゝ成べくお轉婆あるを宜しとし又十六七歳頃より如何ある若き男と交際し共に手を引合て大道を歩行き又ゝ何方へ行て夜遊びをするとも親も咎めず人も怪しま

ず

○日本にて食事する時ハ默止て食そるを禮とすれども西洋にてハ食事の度毎に談話するを例とす

○日本にてハ履物を脱で上へあがれど西洋にてハ土足の儘で座敷まで通る

○日本にて立食と云へバ極々下等社會のする事なれど西洋にてハ貴顯紳士が立食を爲す

○日本にてハ頭を下るのを禮とすれども西洋にてハ頭を持上るのを禮とす

○日本にてハ我女房を使役そるを例とすれども西洋にてハ我女房に鼻毛を伸して使役せらるゝを例とす(尤も是ハ國による)

○日本にてハ諺にも朝起三文の德ありとて朝ハ早く起るを宜しとすれども西洋にてハ大抵十一時頃まで寢るを例とす(尤も夜ハ十二時頃寢に就との事)

○日本にてハ飼犬ありとも只土間へ置のみなれども西洋にてハ平生人間と一所に寢食し又た宴會の席までも同行するを例と爲す

○日本にてハ婦人の方から喫烟をすゝめて男子の心魂を蕩かす者あれども西洋にてハ總て婦人の前にてハ喫烟を禁ずるを例とす

○日本の書物ハ右より披いて上より讀下せど西洋の書物ハ左りより披いて横に讀む

○日本にてハ婦人にて乘馬そる者少なけれども西洋の婦人ハ必らず乘馬に熟す

◎好時節の戯奇文

暑い寒いも彼岸までとハ綴暦の題辭にも仕たき格言、今や其の彼岸も已に過て寒暖度に適し、所謂る暑くもなく寒くもなく誠に上鹽梅の好時節、昨日まで巨燵に潜り込で水ッ鼻を垂した御隱居さんも杖を力に

ブラ〳〵と遊歩を試み、昨日まで安火と首ッ引をして嘘に日を暮した
お婆アさんも珠数を片手に佛參と出掛る有様、況んや身体も達者足も
達者、お負に食ふ事も達者飲む事も達者、最一ツお負に遊ぶ事も達者な
ノラクラ連にして、何ぞ一室に閉居ッてツクチンカンたるを得んや、殊
に上野に向ふ鳥に飛鳥山に、櫻花笑ひを含んでお出で〳〵を極こみ都
ぞ春の錦なる美觀あるに於てをや、諸君何すれぞ浮れ出さゞる、花より
團子とゝ下司張た丁簡酒なくば何の己が櫻かなとゝ泣上戸の言草、酒
ゝ酒屋に在り、團子ゝ團子屋にあり、酒を飲とも團子を嚙るともソコハ
諸君の御勝手次第、是が即ゝち流行言葉の自酒自遊、花の下にゝ團子を
嚙るべからずと云ふ制限もなし、酒を飲でヘベレケになるべからずと
云ふ規則もなし、イザ諸君おし出し給へ、陸にゝ車あり川にゝ船あり、大
陽氣よ道かすなら白拍子を携ふべく、極風流のお好あらば肩瓢の腰辨
とするも差支なし、サア諸君御座んあれイザ御坐んせ、請先魄より始め

んとゝ道人が陽氣にはだされて諸君よ呈するの戯奇文なり、諸君ゝ如
何果て道人の戯奇文に同意し給や否、とまで書し來り此處に然れども
と云ふ極調法な文法を假來つて此の論鋒を一轉し、何とか小理屈を並
べて尻始末を附んものと、頬杖を突て考一考するのとき、友人猪口齋子
蕎麥屋の湯桶然と横ズッポウより口をッン出して曰く、オット道人待
たまへ君ゝ其様な無茶な事を云ふから困る、成ほど時候ゝ極上等に春
めきたり櫻の花ゝポッ〳〵笑ひ初めたり、インフルエンザも何やら退
散したらしく、豫算案の熱度も先づ退却らしければ、黄鳥と共に花間を
飛廻り胡蝶と共に春風に吹れて、咲た櫻にあせ駒繋ぐと大浮れに浮れ
出すに於てゝ、道人の戯奇文を待て然る後に浮れ出すやうな氣の利ざ
る者ゝ世に一人もなし、道人が餘計な鐵棒を曳ずとも、年〻歳〻變らぬ
花見に歳々年々變り易き面付を以て酔脚蹌〻人三化七の大愉快ゝ誰
しも欲する處なるが、扨その愉快を催ぼすの原素ゝ何より生ずるかを

探究せずんばあるべからず、道人試みに世間の景況を見よ、金融い益〻逼迫して高利貸幅を利せ商業い愈〻不振にして物品い藏に眠り、借金取門に滿て妻子飢を訴ふるい蓋し今日の有樣にあらずや、夫れ然り然らば則いち〳〵イヤにひねつて出るね、謹聽〳〵天地の時候い春あるも人間の懷ろ合い皆秋なり否冬枯あり、家賃でさへ兎角延滯して家主より小言を食ひながら花を見て猶心に快きか、米相場い又候騰貴して米屋い貸賣を爲さず、僅かに一升買の米を以て命を繋ぎながら酒を飲で猶心に面白きか、好んば自分い此不景氣を知らざるも、四海の内いみな兄弟、その兄弟分の中に斯の如き人の多きを傍觀しながら、我一人氣樂らしくノホヽン然と浮かれ出して猶ほ心に愉快を感ずるや、道人曰くモウ止し給へ面白くもない、其樣な屁痴八ケ間しい事を云ふやうなら此の戲奇文い取消だ〳〵

◎偽物の害

維新前ある處に万金丹を以て繁昌する藥舗あり公然看板を掲げて本家製造店と稱す然るに其向ふに於て又た万金丹を賣出す者あり是亦た公然看板を掲げて本家製造店と稱す本家の製造店二軒ありて人甚いだ惑ふ蓋し本家に二種あるべき道理なく一を以て本家とすれば其一い必らず支店か然らざれば偽物なりと思へばなり既みして甲の本家より名稱濫用他の商業を妨害するの廉を以て之れを官に訴へ終に勝利を得たり然る處ろ乙の万金丹い又〻一策を案出し更に看板を改めて「本家の向ふに偽の万金丹あり」と書して猶世人を瞞着せりと云ふ又た某處に紫金丹を以て繁昌する藥舗ありしに其向ふに於て又た紫金丹を賣出す者あり自から稱して偽の紫金丹と云へり己に自からの一字を以て許す以上い眞の紫金丹よりい是に苦情を鳴す事も成らざれば止を得ず打棄おきしに偽の一字甚だ妙ありとて一時繁昌したりと云ふ世人今に之れを傳へて一對の茶呑話しと爲す依て道人思

ふに此の二種ゝ何れも僞に相違あきも同じ僞ゑしても万金丹の僞ゝ其事隱然にして紫金丹の僞ゝ其事淡泊なれゞ事を隱然に計るよりゝ寧ろ淡泊の方遙かに勝れりと雖ども併しながら只淡泊と云ふのみにして僞ゝ何處までも僞あり眞似ゝ何處までも眞似あれゞ道人ゝ二ッあがら敢て感心致さず何とあれゞ人の看板を横取して私利を貪ぼらんとするゝ素より男子の爲すべき事に非ざれゞあり然るに近來ゝ道徳地に墮ち義理人情ゝ河虎の屁と共に消失せ恥も外聞も更に頓着せず只法律上の罪人とあらざる以上ゝ公然と人の看板を横取して耻ざる者あり人の噴鼻禪で相撲を取て却ッて名譽とする者あり何ぞ其れ鐵面皮の甚ゝだ敗や若夫れ法律に明文なきものゝ他人の名稱を濫用するも可あり他人の物品を僞造するも可なり只金さへ取れゞ夫で宜しとすれゞ天下ゝ殆んど皆既蝕の天下とならん天下既に皆既蝕の眞暗とあらゞ何を見當にして人間の面の皮を被るや實に之れ無茶苦茶の極度なり思ゝざるべけんや

◎夫婦の關係

身代の貧富を問はず身分の貴賤を論せず凡そ一家の主人となつて一家を支配する者ゝ其一家を寐かさうと起さうと金を溜やうと打潰さうと皆主人の了簡一ッに在るものあれど併し主人となつて一家を支配する以上ゝ寐かしたよりゝ起した方が宜し打潰したよりゝ金を溜た方が宜しかるべし扨て爾する日にあつて見るとイクラ主人だからとて手が三本ある譯でもなし眼が四ッある譯でも無けれゞ只一人にて飯も炊たり洗濯も仕たり着物も縫たり商賣も仕たり何から何まで悉く遣て除ると云ふ事にゝ迚も行あいゆゑッコで女房と云ふものが有て亭主の不得意な飯炊や惣菜の取計らひや又ゝ着物の裁縫洗濯あどを去て亭主を補佐て行て夫で先づ一軒の家がまるく治まつて行ものあり(但し貴顯紳士ゝ此限にあらず)故に女房ゝ素より亭主の下役と

ゝ云ひながら女房ゝ女房だけの權式と云ふものも無けれゞ成らゞ尤も權式と云つたからとて無暗に威張廻つて亭主を尻の下へ敷やうでも困るけれども例へゞ亭主が朝ッ腹から大酒を飲んでグッ〳〵して居るとか又ゝ一枚の晴着まで質に置て素屁多女郎にはまり込とか其外何事にまれ自家の不爲と思ふ事があつた時にゝ能く其理由を云つて飽までも之を止めなければ成らゞソコで其不爲と思つて止るのを亭主の方で見當を違へて此阿魔め何にでもッべコべ〳〵と生意氣な口を出して自己の仕やうと思ふ事を邪魔をする元々自己の身代だものを寐かさうと起さうと大きにお世話だ蕎麥屋の湯桶ぢやァあるめへし横圖ッ方から餘計な口を出すにやァ當らねへ此樣な奴を女房にして居ると一生の不作だ女房と疊ゝ度々替るのが宜から寧その事此奴をペケにして仕舞て今度ゝ自己の氣に入た何でもハイ〳〵〳〵と云つて能く言事を聞く奴に仕樣と云ふやうな事でゝ縱ひ何樣な身代でもあらうとも忽ち滅茶〳〵となる事受合ありト云ふと何だか細君の肩を持やうなれど決して細君の尻押をするにあらず一寸早い話しがマア其樣なものかと思る尤も女房も女房によりけりで中にゝ亭主が汗水を垂してせッせと稼いで居るのに何處を風が吹かと云ふやうな顏をして居たり或ひゝ亭主が汗臭い着物を着て居ても澄ァし込で居たり或ひゝ身所にも構はず旨い物を食たがッたり美衣裳を着たがッたり或ひゝ芝居道樂寄席狂人或ひゝ燒餅やきお饒舌り鐵棒曳などゝサッサと三行り半を持せて放逐なさるとも何とも其處ゝ御亭の思召し次第

◎長尻の人に告ぐ

人に七癖己れに八癖無くて七癖有て四十八癖人毎に一ッの癖ゝあるものを我にゝ許せ敷島の道個ゝ是れ落語家の前座が落語の冒頭に用うるの常語あり成ほど人の癖と云ふものゝ種々樣々にて先づ人の前

にて鼻糞をホヂクル癖より人の前にて無暗に欠伸をする癖及びポチ〳〵と壁の破塵をむしり取る癖クルリ〳〵と指の先で煙管を廻す癖など、一々數へ來らば或ひハ四十八癖の上よ出るとも知れ難しと雖も、併し人毎に一ッの癖ハ必らずある者とすれば所謂るお互ひコッコにして、人の癖も笑ふに足らず自分の癖も恥るに及ばざる事あから、世に長尻の癖ほど人の迷惑するものハ無かるべし、尤も昔し德川の時代にハ人に進取の氣象もあく、又た物事を活潑に處斷そると云ふ事もなく、芋虫ハ何處までも芋虫蛙ハ何時まで蛙にて、只グヅ〳〵然ノソヽ乎として野ン氣に其日を送ッて居りさへすれば夫にて足れりと爲し、或ひハ抹茶或ひハ挿花或ひハ歌俳諧の奴隷となつて永の月日を欠伸にて暮せしが、故に長尻の客も時と場合とに依てハ隨分消遣の助けと成りし事もあるべしと雖も、今日の世界ハ中々どうして其樣な悠長なる世界にあらず天に在るの運でさへ風船に乗てこれを取らんとし、

棚に在る牡丹餅も手を伸して行成り頬張らんとし、夜を日に繼で稼いでも猶足りず成らう事あら身体か二ッ欲き位の忙がしき時節あるに、之を是れ察せずして如何に自分が閑暇あればとて、其忙がしい真中へ呑湖の酒亞突でドッシリと尻を落つけ面白くもない世間話し或ひハ若い時の自慢話しなどを云て、貴重なる時間潰しのお突合をさせられるハ實に迷惑の至りとヤすべし、因て道人ハ此長尻先生に忠告す、長尻先生よ時間ハ金なりと云ふ事を記憶せよ、例へば茲に一時間稼げば若干の利益を得る人あり、然るに其人の處へ行て何も別段是と云ふ用向もないのに、只ベンベラ〳〵と尻を落つけて二時間も三時間も話しこみ、主人公ハモウ宜、加減で切上て呉れば宜と思へど眞逆に忙か敗からず歸ッて下さいとも云へず、據ころあくお三どん或ひハ妻君を呼で、モウ何時だモウ何時だと度々時間を聞ども長尻先生ハ少しも感せず、朝から來てヅドンの午砲、ホンの有合ですがと午飯を出せば先生ハムシヤ

〳〵と召食られて夫からヲヽ暑い〳〵と來て日中の氷水ヤット夕涼になつてハイ左樣ならと御歸館あるよ至つてゝ主人に幾許の損害を與へたりと思ふや、決して惣菜の午飯と二杯の氷水のみにゝわらざるあり、尤も是ゝ長尻の癖ある人に限らず、元來日本人の習慣として兎角に時間を粗末にするの癖あれども、前にも云ひし如く時間ゝ金にして之を空過するゝ取も直さず大金を無益に棄ると同じ事あり彼の西洋の諺に徒らに光陰を費すゝ無上の奢りと云へるも即ち此處の事あり、世の長尻の癖ある人願はくゝ省一省して可あり

◎賣藥の功能

茲に甲藏と云へる人あり日頃懇意にする乙平に奉公人の周旋を依頼しに乙平ゝ日あらずして一人の若い男を伴來り最も自慢らしく饒舌つて曰くさて此の人ゝ私が永の歳月懇意にする家の息子にて丙助と云ふ人なるが此人ゝ御覽の通り男振りも好し性質ゝ温厚篤實殊に學問が好で何をさせても器用なれば是が世に云ふ鬼に鐵棒、先づ其の荒增を予さうあらば和漢の學ゝ勿論洋學にも達して居り字を書、しても立派に書き歌を謠ゝしても美聲で謠ひ算盤も上手なら簿記法も心得て居るアーメンの講釋もすれば南無阿彌陀佛のお經も誦むお負に懸取りに遣れば旨く金を集めて來る商賣をさせれば如才なく人よりゝ餘計に品物を賣る或ひゝ大工の眞似もすれば左官の業も出來或ひゝ建具屋の眞似もすれば經師屋の糊仕事も出來る又た米を搗せれば米も搗き飯を炊せれば飯も炊くが如く何をさせても調法な人なれば此人をお使ひ成されてゝ如何と云はば甲藏ゝ果して之れを善き奉公人と思ふべきや道人思ふに若し甲藏が十人並の人ならば必らず之れを斷わるべし何とあれば其樣な都合の宜い五百羅漢に千手觀音を合併したやうな人間のあるべき筈あく良んば有つたよ致せ万能に達して一心足らず必らず十人並の人に及ばざる事ゝ知れ切て居れば なり而

して賣藥も亦た此理屈に異あらざる道人ハ素より醫師に非ざれバ醫者の事ハ知らず藥劑師に非らざれハ藥劑の事ハ存せずと雖ども前の理屈より推考かへて見る時ハ如何に藥あれバとて頭痛にも利けバ脚氣にも利き寸白よも功能があれバ中氣にも好し其外内服と外用とを論せず凡そ病とし云へバ何に用ゐても功能があると云ハバ是れ甚ハだ信じ難きの藥なり何とあれバ若し脚氣に利く藥を寸白に用うれバ必らず其害あるべき筈あるに毫も其の害なしとすれバ即ハち脚氣に對するの利、目も亦たこれ無き道理なれバあり尤とも昔しの賣藥を製する目的ハ万病に好しとするが土臺にてイクラ服用するとも著るしき利、目も見えず其代り又た害にもならず所謂る毒にも成らず藥にも成らず可もなし不可もなしと云ふ製法よりてありしゆゑ縱ひ糠の中へ溺荷を交て氣付藥として賣るもヒメ糊に紅色をつけて目藥として賣るも決して差支へなき有樣なりしが衛生法の進歩したる今日とありてハ其樣なる胡麻化子藥でハ中々世の人が承知せず否世の人が承知せざるのみならず第一政府に於て之れを許されず故に今日の賣藥ハ一々内務衛生局の試驗を受け衛生局に於て差支へなしと認められたる者にあらされバ發賣の出來ぬ規則なれバ彼の可もなし不可もなしの類とハ異にして其功能の著るしき代りにハ又た用ゐるように因てハ却つて害を招く事のあるハ素より然あるべき道理にて是れハ藥の罪にあらず用うる人の罪なり氣を付けずんバあるべからず昔しハ藥の功能書きと云へバ一概に出鱈目を並べたるものと思ひ居たれど今日の功能書ハ左に非ずして眞の功能書なり殊に其功能用法等の末項に之を用ゐて功なき時ハ速やかに醫師の診斷を乞ふべしと記載しあるが如きハ注意も亦た至れりと謂ふべしソコで道人ハ餅を賣つて砂糖が欲しくなつたやうな注意あれど茲に賣藥舗諸氏に向つて猶ほ一ッの注意を願ひ度きハ彼の功能書の中に幾分か昔しの臭氣を含んで是れ〳〵

の病症にハ是れを呑しても格別の害ハなきゆゑ筆の序でに書加へて置けと云ハぬばかりに主治の症より見れバズット飛離れた病名が記載してある事往々あれども是ハ飛離れた病症でも全たく功能のある物あらバ素より夫れにても宜しけれど若し藥を賣るばかりの目的あらバ却つて信用を失なふの基いあれバ斷然これを削除し只主治の病名のみを列記して此外の病氣にハ一切飲むべからざ位ゐの見識に願ひ度きものあるが果して如何あるものにや

◎徳利とお考へを乞ふ

此處に新しい徳利が一個ある、何處に、ナニ醬への話しサ、ハテね、マア默止て徳利とお聽、下され杯畏まつた、エヽ此處に、新しい徳利が一個ありとした處で、成程都合二ッの徳利が引合になるのだね、ナニさうぢやない矢張り一個サ、あるはど、エヽ此處に一個の徳利が……、夫でハ都合三ッにあるね、是ハ困ッたマア默止て聞たまへ、ハイ〳〵エヽ此處に一ッの徳利が……、是で四個と、モウ止給へ面白くもあい、君も止給へ面白くもあい、イヤ止て仕舞てハ根も葉もあいから道人が一人にて饒舌らんと欲す、請ふ君先づ耳を塞げ、と計りにてハ何の事やら分らねども、是ハ道人が例の誤迷説を吐んとする處を、或る友人が愚弄せし有樣あり、ソコで此聽、下手の厄介者を拂ひ除て新規卷直しに本當の處を少し上れバ先づ此樣あお話しを致す積りて御坐る……エヘン

例へバ此處に一個の新しい徳利があるとした處で此の徳利へ油を入れバ油の徳利とあり醬油を入れバ醬油の徳利と成り又た酒を入れバ酒の徳利、酢を入れバ酢の徳利と成るが如く總べて其中へ入る品物次第て何の徳利にも成るソコで此徳利へ初めに酒を入たのハ一寸洗へバ酢の徳利に遣ふ事を得れども若も初めに油を入し時ハ如何に之を洗ふとも油の匂ひが失ずして何しても酒の徳利と爲す事ハ出來ざるなり然れバ人間も矢張り此徳利と同じ道理にて小兒の時より其親た

る者が能く教育して清淨な酒の德利にして置さへすれゞ何の仔細もないイヤ清淨な酒の德利にして置てさへも年月を經るに隨ッて兎角に油の德利と成りたがるものあり然るを況して最初から油德利に養育て置かから自分の勝手が惡くなつた時に及んで此野郎ハナゼ油臭いのだ此奴ハナゼ親の云ふ事を聞あいのだァ斯どうも我儘でハ困るアヽ此樣あに親不幸でハ仕方がないと頻に愚痴を溢し小言を並べる人あれども夫ハ無理と云ふものあり何とあれば其我儘とあり親不幸となりしハ元來誰が仕たので有らうか是即ち子の罪にハあらずして親たる者の教育が不完全あればあり去りながら中にハ親ハ何時まで酒の德利にして置やうに教育する積りなれども肝心あ本人が油を賣るノラクラ連中と交際を初め所謂る朱に交れば赤くなるとやらで折角清淨な身躰を油德利にして仕舞ものもあるなり而して德利の油臭くありしハ破毀て仕舞ことも出來又た新に買替る事も出來るあれども人間がノラクラ者になつて外へ出てハ油を賣り內へ歸ッてハ油を取られ猶は自身も油汗を流すやうに成しハ眞逆に打殺して仕舞わけにも行ず又た新ゑ買替る事も出來ない處から彼方へ行てハゴロ〳〵此方へ行てハゴロ〳〵下手な雷が太鼓の稽古でもするやうに明ても晩ても只ゴロ〳〵〳〵と轉附て人の邪魔物にされるやうに成てハ夫こそ世界の穀潰し天道樣に對しても誠に申し譯の無き事あり思ハざるべけんや扨て斯樣にお話し申せば親たる者ハ子に爲すべきの道を教へあければ成らぬ子たる者ハ能く親の教に隨ッて爲すべきの道を盡さねば成らぬと云ふ事ハ十分お了解に成りたるべしイヤ夫がお了解にありさへすれば其他にハ何にも申す事ハ之あきなり猶は德利とお考へを乞ふ

◎花見談語

智惠も淺草凡倉前の片隅にチヨサクあつて虫の息を保つ者を誰とか

爲す即はち是れ痩々亭の主人骨皮道人その人なり而して道人の住處より隅田堤までゝ路程遠きにあらず先づ吾妻橋のッイ傍まで鐵道馬車の厄介とあるも僅かに二錢の散財にて事足り他の乘合馬車なれバ猶是より五厘を減ず(化痴お話しだ)尤もポッ〳〵歩行バロハにて至るべし(猶ほ化痴だ)因て本月八日お釋迦様の誕生日に甘茶でカッポレと尻を端折つて踊り出せしゝ丁度ヅドンの砲聲が空腸に響くの正午お り膳の上の惣菜で一杯引掛て微醉機嫌と成り(註に曰く先方へ行て飲む)より〻自家で飲で行た方が手輕あれバあり)相棒もなんにも無しに只一人でブラ〳〵然と程なく辿りつきし花の場處ズット見渡せバ得も云はれぬ好風景これを堅苦勞しく云へバ紅雲十里とも云ふべくこれを氣取て云へバ花の隧道とも稱すべし而して此處に群集來往するの人〻老とおく幼とおく男と無く女と無くウヨ〳〵として恰かも蟻の百度詣りをするが如し今當圖ッ放を以て其人種を分析すれバ紳士あり山師あり學者あり風流人あり商人あり百姓あり職人あり土方あり書生あり醫者あり神主あり坊主あり車夫あり馬丁あり伴當あり小僧あり按摩あり(但し目明)權助あり又た女隊の方に於てゝ奥方あり御新造あり内儀さんあり山の神あり お娘あり年增あり乳母あり お三あり藝者あり權妻あり娼妓あり豆どんありッコで此等の人々〻花を見に來たのか人を見に來たのか乃至またお調子で飛出して來たのか面白半分に暴れに來たのか其の邊の處が測量が出來兼ると雖も十中の八九〻先づ夢我夢中で跳出した野痴馬と云ふも敢て不可あきもの〻如し殊に束髮のお嬢さんが若い男と歩行おがらの瓢箪酒〻人をして覺えず此ン畜生めの語を發せしめ六十以上のお婆ァさんがくの字の腰で千鳥足〻人をして覺えずァゝあぶないの聲を掛しむ嗚呼〳〵大層御愉快さうな花見おる哉去りおがら花若し目あつて之を見口あつて之を評せゝ將た之を何とか云〻んと、思ふて茲に至れバ折角飲だ酒も

ロゲリと醒さうな鹽梅にあつて來れり是に於てか道人又た氣を取直して以爲らくィヤ〳〵さうでない世にも花七日と云へば毎日浮れた處が多寡の知れた事偶にハ命の洗濯するも宜しかるべし其代り働らく時にハウンと働らいて貰い度ものだが爾ハ行ぬものか知らんと餘計あ苦勞の種を蒔て凡遣する事一時三十三分間ばかり折から後ろの家形船に流行唄を謠ふ者あり曰く「曇りし空も晴れ渡りさても愉快あ櫻がり下戸も上戸も差別あく花が取持つ宴かいあ」

◎ブラ〳〵

骨皮道人ハ昨年以來の不景氣に追まくられて金儲けの蔓を失ひ貧乏暇なしあら宜けれど貧乏暇ありとハ飛だ變則に陷りたり是を以て毎日只ブラ〳〵として貴重あ光陰を無益に送り這入るものハ借金取にして出るものは欠伸のみ然りと雖ども只ブラ〳〵として居てハブラ〳〵病ひが出るかも計り難し命あつての物種とハ決して常談にあらず宜しく身体を養ふて一時一刻たりとも長命するに如ずと何の當途もなけれど運動かたく自家を飛出し其近邊をブラ〳〵することと恰かも小田原提燈が與市兵衛に頼まれたるが如し時に一友人あり是亦たブラ〳〵として向ふより來るに會す道人問ふて曰く君ブラ〳〵として何れの處ろに至るや友人答へて曰く今日ハ幸ひ一日の閑を得たれば只ブラ〳〵と此處まで出掛けしあり何か面黒事件にてもあらば半口乘せて呉れたまへ道人曰く僕も亦た其面黒事件を探し當んが爲めにブラ〳〵として此處まで來りしありと胸中を打明て見れば お互ひにブラ〳〵にして忽ち一人のブラ〳〵を增加し併せて二人のブラ〳〵を出來せり友人曰く君もブラ〳〵ブラ〳〵の鉢合せとハ實以て奇〻妙〻去りながらお互ひに只ブラ〳〵として歩行も途に弗函の落て居る氣遣ひも無ければ更にブラ〳〵の方向を轉じて龜井戸の藤見物と洒落てハ如何と友人の動議ハ忽ち道人の贊成を得

て一も二もなく是れに議決し夫より又たブラ〳〵と龜井戸へ出掛けたり素より遠き道程にも非ざれバブラ〳〵行く中いつの間にやら龜井戸の天神社に着したりソコで以て又たブラ〳〵と歩みながら四方を眺むれバ藤ハ丁度宜い加減の見頃にて棚の上からブラ〳〵とブラ下りて今を盛りと色を爭そへり而して其の藤のブラ〳〵を眺めんと欲して態々此處に來りし人々ハ我と同じく池の周邊をブラ〳〵する者あり掛茶屋に酒を飲でブラ〳〵する者あり我方にブラ〳〵此方にブラ〳〵ブラ〳〵の連中甚はだ多し猶ほ之を小分すれバ紳士のブラ〳〵あり毛唐人のブラ〳〵あり商人のブラ〳〵あり百姓のブラ〳〵あり職人のブラ〳〵あり車夫のブラ〳〵あり御新造のブラ〳〵あり藝者のブラ〳〵あり別嬪のブラ〳〵ありお三のブラ〳〵ありお乳母のブラ〳〵あり小僧のブラ〳〵あり其他難のブラ〳〵艱のブラ〳〵一々數へ立るに追あらず是に於てか道人以爲らく藤の花のブラ〳〵ハ此の如き場末にブラ〳〵すると雖ども此大勢の人目を娛しましむるの功能あり然るに道人ハ常に繁華の地にブラ〳〵しながら兎角に糸瓜のブラ〳〵と同一視せられて人の鼻撮みとなるハ何事ぞ誠に氣耻かしき次第なるかな道人のブラ〳〵ハ藤のブラ〳〵に及ばざる事遠しなどゝ我と我身を責來らバ緋鯉のブラ〳〵として泳ぐのも道人のブラ〳〵を愚弄ものゝ如し依つて早〻友人を促がして歸途に就き歸ッて後ランプの前に居睡りしながら此ブラ〳〵の文を草す然れども元ブラ〳〵が趣意なれバ何の功能もなき處ハ諸君惡からず御笑知下さるべし

◎五月の鯉

端午の節句ハ最早過ぎ去たり吹流しの鯉ハ疾に葛籠の底へ押込られたり節句已に過ぎ吹流しの鯉も亦た已に無きの今日に及んで五月の鯉なぞゝ陳腐の寐言を搖ぎ出すハチト証文の出し晩れに似たりと雖

も此の寐言たる強がち際物にもあらざれゞ諸君其の心して御覽下さるべし扨て「江戸ッ子ゝ五月の鯉の吹流がし口先ゞかり腸ゝあし」と云へる古き狂歌あり元來この惡口ゝ何人の口より出しか其の邊の處ゝ慥かに相ひ知り難しと雖ども此の狂歌たるや能く江戸ッ子の氣性を穿ち得たりとて江戸ッ子の無敵流も常に自から之れを甘受し又た彼の落語家も江戸ッ子のことに就て饒舌る毎とに之れを前口上に用ゆるを殆んど例と爲せり然れども是ゝ舊幕時代の事にして已に今日の如く時勢一變全國を以て一家の如く爲すの時に當ッてゝ東京も亦た以前の江戸と異なり向家ゝ長崎の人にしてバッテレンの言葉を遣ひ隣家ゝ奥羽の人にて赤腹ゝ垂れヤさぬと云ふ有樣あれゞ彼の口先ばかりの腸あきを東京の者のみに脊負し附るべからず宜しく之を全國に平均すべし若し之を全國の人種に平均する時ゝ腸のあき五月の鯉に齊しき人間ゝ甚だた多きやうに覺ゆ諸君試みに先づ指を屈して勘定して見よ例へゞ唯我獨尊五大洲中他に滿足な人間あきが如くに搆へ込み若し我をして政權を握らしめゞ陸海軍ゝ云ふすべし外務國債ゝ斯くすべし或ひゝ司法權を何して警察部を何する覺悟ありあやゝ口から出任せの大法螺を吹あがら肝要ある我一身一家ゝ累卵の危きに迫るが如き五月の鯉あり或ひゝ和漢洋古今の成敗を鵜呑にして傍ら政治法律心理經濟何ありとも凡そ學と名の附くものゝ書として讀ざるなく理として曉らざるあしあやゝ口から出任せの大法螺を吹きあがら其實そこし骨のあるものゝ口の中で唯グヅ〳〵と胡魔化すが如き五月の鯉あり或ひゝ富士山を開墾して遠州灘を埋め北海道の北の隅より琉球の南の果まで唯一線に鐵道を敷設して水陸の興業を盛んにし强兵の事ゝ暫らく當局者に依托するも富國の責任ゝ我が一身に負も差支へあしなやゝ口から出任せの大法螺を吹あがら其實南京米を食て漸く虫の息を保つが如き五月の鯉あり或ひゝ高燥の地を撰んで

一大病院を建築し多年經歷あるの人を集めて各自專門の患者を代診せしめ我い院長の位地に座してコッポ結核病の治療を專務とせんと略計畫い成りたれども時機の未だ至らざるい遺憾あり奈ども口から出任せの大法螺を吹あがら其實い玄關淑として風邪の病人も來らざるが如ぎ五月の鯉あり或ひい泣く〳〵鼻下の髯を剃落し昨日までい胸の邊りにヒカ附たる金側時計も今日い質屋の藏に縛られるの極度に達しあがら猶は人に對してい强て笑ひを粧ひ些ふたる俸給の爲に一身を束縛せらるゝい素より心に快よしとせざる處あれバ潔よく冠りを掛て自由の空氣に嘯ぶく事に決心せりあども法螺と負惜みを合併したる五月の鯉あり其他何と云ひ艱と云ひ一〳〵算へ來らバ其數い京の三十三間堂の佛の頭數より猶澤山にあるべしと雖も道人も亦た五月の鯉なれバ尻尾の出あい中に先づ此邊でお仕舞にせんと欲す冀くバ諸君五月の鯉の仲間に數へらるゝ勿れ

◎花骨牌の流行

近來流行する物の頗ぶる多し然れども其の流行物の中に就て第一位を占るものい蓋し花がるたなるべし而して其花骨牌の物たる其數僅かに四十八枚これを天智天皇の骨牌に比すれば其半數にも滿ずして只小兒の一遊具に過ぎずと雖も其の勝敗を決するの面白味に至つていい遙かに百人首の上に出ると云へりハテ不思議同じ骨牌でありあがら何故に斯く面白きや他なし是れを使用するの方法に因ていい濡手で粟の僥倖を博する事あればあり然れども濡手の粟い當にあらざるの幸ひあれば之れを當にすれば却つて泣ッ面を蜂に螫れるの不幸も亦た之れあり猶は其度を進むれば口論掴み合の騒動も是れより生じ泥坊人殺しの惡心も亦た是れより生ず故に近年までい之れを社會の害物として遊具と爲す事をも嚴禁ありし然るに其後政府より其束縛を解き公然の賣買を許されしより以來誰一人として憚かる色なく紳士豪

商より以て權兵衛八兵衛熊八連よ至るまで頻りに之れを鬪ハして愉快と爲し待合の座敷に時あらぬ花を散し船宿の二階に時あらぬ雨を降し其他甲に乙に丙に丁に到る處ろとして四季の模樣を弄そばざるハ無し嗚呼是れ喜ぶべき事か將た憂ふべき事か道人ハ其の判斷に迷ハざるを得ず何となれバ則はち之れを泰平の餘樂とすれバ喜ぶべきも若も之れを私慾に役せらるゝ賭博とすれば甚だ憂ふべき事なれば なり而して諸君が日々夜々熱心に勝敗を爭ふ所の花骨牌ハ果して泰平の餘樂あるか私慾に役せらるゝの賭博あるか想ふに私慾に役せらるゝの人多きに居る者の如し何ぞ其れ不了簡の甚だ敗や或人曰く賭博ハ法律の許さゞる處而して其用具たる花がるたを禁せざるハ孟子の所謂る陷を國中に作るものにあらずや然れば此惡弊を除かんと欲するにハ先づ政府より之れが使用を禁ずるの外ハ無かるべしと成るは是れも一理なきにハ非ずと雖も併し花骨牌を以て強かち賭博の

用具とのみ斷定すべからず何となれバ之れを賭博の道具に使用するハ使用する者の罪よして決して花がるたの罪にあらざればなり若し夫れ賭博に使用する者あらは皆是れを賭博の用具として廢するとすれば例へば茲に碁を圍んで奕する者あり然らば此の碁盤も亦た賭博の具として廢すべきか又た茲に將棋をさして賭する者あり然らは此の將棋盤も亦た賭博の具として廢すべきか否か決して左樣あ理屈ハあらざるべし花骨牌も亦た然り花がるたハ元遊具あれども之れを使用する人において賭博に用うるが故に賭博の具とある事恰かも出刄庖丁を以て人を殺せバ出刄庖丁忽ち變じて兇器となるが如し故に花骨牌を弄そぶハ好し唯これを誤用して法律上の罪人となる勿れ

◎娼賣替のよしあし論

或人娼妓を罵ッて曰く娼妓ハ人面獸行あり世に娼妓ほど賤しき業体ハなしと如何にも御尤も千万娼妓ハ人面獸行世に娼妓ほど賤しき家

業いかるべし或人又た娼妓を買ふ者を罵ッて曰く世に女郎買を好むほど馬鹿な事いなし之を白痴と謂ずんバ何をか白痴と謂んやと成ほど之も御尤も千万世に女郎買をするほど白痴た事いなかるべし或人又た曰く娼妓い牛馬にも劣るの賤業又たこれを買ふ者い牛馬と交とりを同じうするの大ベラボウ大白痴なり已に賣る者も人間の爲すべからざる事買ふ者も亦た人間の爲すべからざるの事とすれバ二ッながら害あつて益なきのみならず斯の如き牛馬的一般の者を此の儘捨ておくときい大日本帝國の体面を穢し我々四千万同胞の恥辱ともあれバ一時一刻一秒時間も早く之を廢して悉く正業に就しめ以て純然たる眞人間の世界となすべしと成ほど仰せを聞バ一〻御尤も千万道人いお先眞ッ暗やみの夜に牛を牽出したやうな男なれども御説甚だ感じ入り両肌を脱ぎ両手を擧げヒャ〳〵と呼び謹聽〳〵と叫んで大賛成仕つる處ドウか成らう事なら娼妓を廢業させて正業に就しめ

買人の白痴を變じて満足な人間にし貰ひ度ものなり然りと雖も道人或ひい恐る是謂ふべくして行なふべからざるの部分に屬せん事を尤とも娼妓を廢するい造作もない事にして手を伸して棚の上の牡丹餅を取るより猶ほ易し去りながら其の娼妓を全廢した處で或人の目算通り大日本帝國の体面が立派なものになるか又た四千万同胞の恥辱がスッパリと雪げるかと云ふに开い仕上げた後にあらざれバ確乎な處い知れ難しと雖も儘に成らぬが浮世の習ひ何事も目算通りに行き難きい彼の越中褌の向ふより外れ取除無盡のいつも空闇を引が如くなれバ藪を突いて蛇を追出し角を直さんとて牛を殺すやうな事が出來いせぬかと取越苦勞を仕つるなり元來動物殊に人類に於るの色欲い他より抑制し又い禁止すべからず良んバ強て之を抑制禁止するも決して其の抑制禁止に甘んずる者にあらず然れバ縱ひ娼妓を全廢して外面上い立派になりたりとて之に代るに地娼的がムクムクと出か

けて此の大日本第一の首府たる東京市内十五區下町と山の手とを問はず到る處に白首が往來してアラ旦那入らッしやいよ偶にやア一晩ぐらゐゝ宜ぢやありませんか抔と痴話喃くたる時ゝ其の醜猥殆んど名狀そべからずして却つて今日存娼の醜猥に十倍するに立至りゝせぬかと存ずト先づ書翰ゝ書て見たが斯く云ふ誤當人も何が何やら何したら宜いのやらサッパリ譯も分らぬ見當も附ざるあり

◎娼妓より代つて廢娼主義の旦那に與るの書

馬骨の本場新吉原の素屁多女郎等謹み再這逆ッべ反り蜻蛉返りべッカコウ亦ン平して以て粗末なる鐵釘折の一書を物知りの旦那様方に呈し奉つる妾等この頃某お客様より承まゝるに旦那様方ゝ近來妾等の身の上をお案じ下され稟そ廢して仕舞つた方が奇麗サッパリとして宜らうとの御見込にて色〻お骨折下さるとの事妾等これを聞て何ぞ其御親切に感せざらんや然りと雖ども旦那様方の妾等を廢せんとせらるゝの御趣意ゝ妾等を以て可愛想なり不便なりと思し召さるゝに在るか將た又た妾等の娼賣ゝ賤且つ醜なるが故に之を止めさせんとそるゝ在るか妾等ゝ未だ其邊の處ろを慥かに承知仕まつらずと雖ども妾等が一寸小耳にはさむ處ろによれば旦那様方が妾等を廢せんとせらるゝの御趣意ゝ妾等を可愛想なり不便なりと思し召すのお心根にゝ非ずして只妾等ゝ文明世界に置くべからざるの醜業にして一國の躰面よも關係する故斷然これを廢するに如ずと云ふに在りと果して然らば妾等ゝ溝ッ端の犬の糞と同一視せられてペケを食ふに外あらざる者の如し夫れ妾等の業ゝ素より賤且つ醜なり豈に旦那様方の御鑑定を待て然る後に知らンや然れども事の此處に至るゝ實に止むを得ざるの事情に出づるものにして決して浮氣や酔狂にて爲すものにあらず故に旦那様方が廢娼論とやらンを唱へらるゝゝ誠に有難迷惑と了さゞるを得ず何

とあれば妾等をして悉く正業に就くの資金を得せしめ然る後に解放せらるゝあらば妾等の幸福ゝ之れに過ぎざれども只醜業あり國辱ありとして突然ぺケにせられてゝ殆んど當惑仕つれば なり旦那様方よ旦那様方ゝ能く物の道理を辨まへ能く事の善悪を御存じのお方〻あれゝ妾等が餘計お差出口をせずとも遠くの昔しに呑込んで入らッし やるかゝ存せねども世の中ゝ廣し世界ゝ大あり醜業と國辱とゝ強がち妾等のみに限らん例へば强盗窃盗の如き或ひゝ苍賊騙奴の如き或ひゝ放火人殺しの如き或ひゝ非人乞食の如き或ひゝ無鑑札の私窩子の如き是等ゝイクラ多くとも一國の体面にゝ關係せざるか文明世界に之れを置とも差支へゝなきものあるやヨモヤ左様な道理ゝあらざるべし若し夫れ妾等を以て文明の害物あり一國の体面に關する者とすれゝ彼等の悪黨人非人ゝ之れを何とか謂ふや然るに彼等を退治するの策をも講せずして徒らに妾等を以て醜業あり國辱ありと責るゝ恰かも大火事を差置て提燈の火を吹き消に異あらず何ぞ夫れ順序を誤るのドシチンカンなるや旦那様方よ妾等ゝ廢業を嫌ふ者にあらず廢業ゝ素より願ふ處と雖も万一廢業の後に至つて鼻の下の干上る事あらば如何その時ゝ高見で御見物を成さるゝ御所存なるや旦那様方に於て高見の見物を成さらば妾等ゝ止むを得ず無鑑札的の仲間入りをするより外に仕方なし尤とも是とても自から好んで爲すにゝあらざれども正業に基くの資力あければ是以て餘儀なき事なり故に旦那様方に於て妾等の營業を廢せしめんとあらゝ宜しく後の處分法をもお考へ下さるべし若し然らずして只面白半分に妾等を弄物にしてチョロッカな事をされてゝ妾等ゝ却つて迷惑の至りなり敢て問ふ廢後の處置ゝ如何お取計らひ下さるゝのお見込みあるや否や素屁多女郎等頓首頓首再這〻恐惶謹言めで度

◎書物は讀べし讀まれる勿れ

鸚鵡ハ能く人間の口眞似をすれども鳥類ハ何處までも鳥類なり猿ハ能く人間の手眞似をすれども獸類ハ何處までも獸類なり鳩ッぽッ〳〵に三枝の禮あり鴉かア〳〵に反哺の孝ありと云へど是とても何だか當にハ成らず然れども鷄鵡が人間の口眞似をするハ鳥類中に及ぶ鳥なく猿が人間の手眞似をするハ獸類中に及ぶ獸なし若しも鳩ッぽッ〳〵に三枝の禮あり鴉かア〳〵に反哺の孝ありとすれバ夫こそ實以て感心と云はざるを得ず而して人間ハ万物の靈長なりと云へど是ハ何處の誰が附て呉た名目なるか更に相分らぬと雖も果して人間を万物の靈長とすれバ最も名譽の位地を占て居る動物なれバ何ハ扱おき其靈長たるべき事だけハ是非とも仕て見せねバ他の禽獸社會に對して誠に面目次第もなき事と謂ふべし併しながら人ハ生れながらにして知る者にあらぬと古人も云はれたる通り如何に目から鼻へ飛拔けるやうなハシッコイ人ありとて赤ン坊の中から物の道理を心得て居る者にハ非ざるゆゑ其處で學問と云ふものが入用になつて來るなり然らバ其人間に入用なる學問もせぬ物の道理も知らず只人間の面の皮を被ッて居ると云ふ休裁のみにして自己ハ万物の靈長だと威張つて居た日にハ恰かも銀行の看板をかけて紙屑拾ひをするに異ならず思はざるべけんや而して其學問とハ如何なる事をすれバ宜かと云ふに當世風で行バ先づ歷史を讀で大閤樣ハ何樣な氣質の人であつた彌治郎兵衛喜多八ハ此樣な男で有つたと云ふ事を知り又第理書を讀で雷ハ太鼓を叩くのでハない地震ハ鹿嶋樣の仕業でハない瓢箪から駒が出ると云ふのハ虛言だ灰吹から蛇が出ると云ふのも當にならぬと云ふ事を知り其外經書にまれ洋學にまれ政治學にまれ法律學にまれ經濟學にまれ哲學にまれ難でも艱でも夫々の書物を讀で其の譯拆を曉り之を腦髓に浸込して夫から其腦髓の働らきで虛言と信を撰分け其虛言の方を屁消にして信と想ふ所の正味を殘し其殘したる信の事

を旨く調合して初めて書物を讀だ功能が顯はれ人間の智識と云ふものが出來るあり然るに其智惠袋を重くして利口になり彼の鳩ッぽッ〳〵や鴉かァ〳〵に負おいが爲めに讀だ書物が却つて身の仇と成り夫が爲に大切の身代を棒に振て仕舞ふ人も往々あれど是ハ世に云ふ人參を呑で首を縊るの類で早く云へバ書物に魅されて馬鹿と成りしなり敢て問ふ看客諸君が御交際の中にも此の如き万物の靈長ありや否や

◎昔し話し

むかしある處に少し薄馬鹿の夫婦ありて或時いづれよりか一個の餅を得たり然れども二人の中へ只た一ッの餅を得たる事あれバ甚だ不都合にて之を亭主が食へバ女房いたゞ安戲樂閑として見て居らねバならぬと云ッて女房が食へバ亭主の方が盆槍として指を嘲へねバならぬやうな工合なり尤も仲宜く半分づゝ分配て食へバ依怙贔負のあき道理なれども夫でハお互ひに食足りないとの押問答ソコで亭主が一策を考へ出してイヤ自己が宜事を思ひ出した先づ此處で二人が無言の賭をして勝た者が此餅を食ふ事よしていどうだと云へバ女房も夫ハ面白からうとの大賛成是に於てか二人の眞中へ彼の餅を置て互ひに負じと睨み合を初めたり然る處をりから夜中の事あれバ一人の盗賊來りて家内に入り其處に有合ふ家財什器を手當り次第に皆奪ひ己に持出さんとすれども夫婦の者ハ彼の無言の賭に負て餅を取られん事を恐れ目にハ盗賊の働くのを見ながら一言をも出さずして居たりけれハ盗賊ハ益々平氣にありて種々様々と勝手な事を爲し終にハ女房の衣服をも剝取らんと爲しけるにぞ流石の女房も今ハ忍び得ずして聲をあげ夫の身として妻の剝るゝを見ながら猶聲をも出さずに居たまふ事やあると罵りければ亭主ハ大いに喜びて然れバ賭事にハ我こそ勝ちたりと彼の餅をとりて食ひけるとかや

骨皮道人曰く僅かに一個の餅を得んが爲めに家財を失ふをも知らざるゝ馬鹿の天邊あり誰か是を愚と云ゝざらん併しおから諸君ゝ滅多にこの夫婦の愚を笑ふ勿れ世の中にゝ僅かなる酒食の味にふけりて大切の生命を棒に振るをも知らざる人もありまた賤しき色ゑ溺れて父母兄弟をも顧みざる人もありおは財欲遊興の爲に先祖代々の田地家庫をも玉おしにする人もあり是れ彼の夫婦の愚に異らざる無きか能く〳〵考ふべき事にこそ

◎金借の沿革

往昔の人間ゝ極く〳〵正直殊に柔順で、右を向と云へバハイ、左りを向と云へバハイ、寐轉べと云へバハイ、お辭儀をしろと云へバハイ、造次に顚沛にハイ〳〵然たる事、恰かも甲州馬の如く恰かも新嫁の如くにてありしゆゑ、金を借りる證書面おとも今日の如き七面倒臭きものにゝ非ず、只その文面中に若し期限に至るも御返濟致さぬ候節ゝ人中にてお笑ひ下さるべく候云〳〵と記するを以て一般の例と爲し人に笑ゝるゝを以て此上もおき恥辱と思ッて居りしとの事あり、然るに其後少しく人間が横着になつて笑ッた位ゐでゝ平氣の皮で居るゆゑ今度ゝ借主の外に請人と云ふものを立て若し本人が返さゐい時にゝ請人から返す事とおれり、然るに其後に至ッて又〳〵人間が横着になり、本人も請人も平氣の皮で居るゆゑ今度ゝ金高相應の抵當を預ッて金を貸す事とおれり、然るに其後人間が又〳〵横着におつて百兩の抵當に編笠一蓋を以て誤魔化すやうに成りしゆゑ、今度ゝ一圓に付て何程と云ふ印紙を張て其間違ひなきを證せり、然るに是も當座の事にてツマリ平氣の皮で居るゆゑ今度ゝ三名以上の連借證で無けれバ金ゝ貸さぬと云ふやうゐ事とおれり、然るゑ三人五人の牡丹餅判をベタ〳〵と押捺ても中〳〵返さぬゆゑ今度ゝ裁判所へ引張出して身代限りを取る事とおれり、然るに段〳〵と身代限りの出し方が上手におつて其前に財産を他へ隱し

夏冬の道具一切として澁團扇一本よ破損た安火を一ツ放り出して澄アし込で居る有様とおりしゆゑ、今度ハ財産を隠した者ハ是〳〵の罪に處すると云ふ法律を設け、又た一方からハ執達吏と云ふお役人様を以て道具諸式から襦袢帽鼻褌に至るまで取押へて封印をつけ、若し金を返さ無けれバ其品物を片ッ端から古物商に賣却して貸金の惣高及び利子諸入費までをもフンダクル事とハ成れり、是れ今日現在行ハれ〻處ろの實況にして我〳〵貧乏人が涙を溢すの種ありとす、而して初め人中にてお笑ひ下さるべく候の無造作と今日執達吏を煩ハして財産の取押へを受けるとを比較すれバ、宛ながら乳母の心切と繼母の邪見とはどの大違ひありと雖も、元來この繼母の邪見を作り出したるハ何人の罪あるかと云ハバ、即ち我〳〵貧乏人の横着根性より終に此甚だしき結果に立至りたるものと云ハざるを得ず、然れども此場合に臨み實に迷惑千万あるハ親戚知己朋友の義理人情より彼の連借證に加印せし者あり、素より表面上の法律より之を見る時ハ其金を遣ふと遣ハざるとに拘らず己に連借として記名調印を爲したる以上ハ無論連帶の債務者たるを免かれずと雖も、其實一錢の金をも遣ひしに非ずして債務者の一人に算へられ、其極執達吏に飛込まれて私有の財産を公賣せらるゝに至ッてハ此上も無き大迷惑あらずや、尤も連借證に加印するハ若し本人が返濟の義務を怠りしときハ自ら肩負て立事ハ万〻覺悟の前あるべけれども、人の爲めに只ムザ〳〵と身代を棒に振るも餘り出かした事にも非ず、故に近來流行の連借證に加印するにハ能く〳〵前後を考へて然る後にすべし、只一片の義理よ搦められて無暗に牡丹餅判を押し後來咽よ支るの禍ひを招く勿れ

◎金貸諸君に一言す

古人曰く詩を作るより田を作れ何某よりハ金貸に爲れと成ハど古人の云ひ置し事ハ無益口はなし何とあれバ縱ひ李太白陸放翁の如く月

落流儀の寐言を旨く並べ立たりとて、其實利上に至つてゝ種毒の權兵術にも及ばず又た長髯高帽にして高慢痴機に當世の是非を談ずるも懐中に〇なければ按摩の可市にも及ばざれば況んや權力より〻金力の勢ひ強く地獄の沙汰も金次第なる今日に於てをや是を以て金貸〻日を追ふてドシ〳〵と幅を利せ金借〻日を逐ふてピー〳〵に命を縮む嗚呼金が欲い金貸にありたい金が敵きの世の中と〻云へどうか其敵きに巡り逢て返り討こそ望ましきものあり然り而して其ドシ〳〵幅を利せる金貸に種々あり例へば銀行も其仲間なり質屋も其部類なりと雖も銀行に〻銀行の規則あり質屋に〻質屋の條例あり殊に銀行〻我々素寒貧の話し相手にあらざれば敢て云〻ず質屋〻我々がピー〳〵の相談相手になつて呉れるがゆゑに是れ亦た何にも了そ處ろなし只道人が頼まれもせぬ貧的の總代とあつて此處に愚痴を溢し此處に苦情を訴へ此處に泣言を並べ此處に歎願を爲さんと欲する所のもの〻近來流行する所の高利貸即〻ち是あり諸君試みに思へ昔し舊幕の時代とても高利貸のなきに〻非ず殊に又政府が特別に高利貸を保護する等の慣例もありしと雖も其頃の高利貸〻俗に按摩金と稱して金主〻概ね富人なるが故に廢人を助くるの趣意によつて政府より暗に保護せしものなるべし然るに今日の高利貸〻決して廢人不具にあらざ尤も多數の中に〻或ひ〻廢人も交り居るか知らねど先づ十中の八九まで〻皆目より鼻に拔るやうな人ありと聞けり而して其貸與法に於けるや身元確實なる者三人以上連署して以て共に連帶の債務者と爲さしめお負に其金額に對する相當の動産不動産を書入れ返濟期限〻滿二ケ月なれども若し月末に約束するとき〻三ケ月に跨るが故に利子も亦た三ケ月分を添へ猶ほ利子〻十圓に付二十五錢の割と云へば思ひの外安きよ似たりと雖も其代り手數料としてテンに二割を引き例へば百圓の元金なれば二十圓差引て八十圓だけ渡し五

十圓の元金なれバ行成り十圓取て殘り四十圓を渡すの方法ありと云へり何ぞ其れ貧乏人をイヂメルの無慈悲にして其方法の無茶苦茶なるや抑も金貸ン金を貸すのが商賣なれバ利子の高きも可あり保証人を要するも可ありと雖も相當の抵當品を書入れる其上に三名以上の連借人を要するとハ何事ぞ又た元金二割の手數料とハ果して何の手數料あるや凡そ何事に限らず物事を取扱ふに手數の掛らぬものハあるけれバ手數の掛るものにハ手數料を取るも宜しと雖も併し手數料も大抵相當と云ふものがある者にて百圓の金を貸に二十圓の手數料とハ餘りと云へバ餘りの無茶取あらずや故に道人ハ金貸諸君に對して敢て無理な注文を爲すにあらず只此手數料を廢却あらん事を希望し且つ其筋に於ても是等の事に就て一定せる御規則を御發布あらん事を願ひ奉つるものなり

◎男女の手紙を同一にすべし

手紙ハ言語の寫眞ありとハ何人の格言あるぞイヤ何人の格言でも御坐らぬ即はち斯く云ふ骨皮道人怠慢生の誤迷案にていなり元來日用の往復文あるものハ縱ひ輕と九太夫が上下に居て半分づゝ讀むやうな長文句にもせよ、又た三どんが一錢奮發しておッかァまめか私もまめだよと葉書の裏面に鹿尾菜の行列をさせた短かい文言にもせよ皆言語の代りに書送るものにして早く云はゞ用句さへ便ずれバ毋上愈々御壯健に被爲在と書もおッかァまめかと書も其の効能に至ッてハッキリ同じ事あり而して男子と女子と平生の言葉づかひに於て異ある處ろがあるかと云ふに只語氣に於てハ少しく剛柔の別ありと雖も彼の手紙の文句に書が如く短簡捧呈致しハと一筆去めしたるハどの大違ひハあらざるあり夫れ普通の言語に格別の違ひなき以上ハ其言語に代用すべき手紙も亦た殊更に小八ケ間しき差別をつけるにハ及ばざる筈あるに其言語が手紙と化變るに當ッてハ御影石と奴子

豆腐ほどの大違ひを生ずるとゝ誠に以て合点の參り難き次第にあらぜや故に道人ゝこれを改良して男女とも同一の文法にしたらんにゝ至極便利あらんと存ず尤も此事ゝ曾て大日本教育會に於ても其議ありしやに聞及びたる事ありしが其後これを實施するの手續きありしを聞ず思ふに其方法の六ケ敷して容易ゝ實行し難きより終にそのまゝ立消の姿と相成たるかと存ぜれども併し道人の考へにゝ大日本教育會の諸君が一肌ぬいでお取掛りにあらば左まで六ケ敷事にゝ非ざるべしと信ぜるなり斯くヤさば然らば道人ゝ如何なる方法を設けて之を一洗するかどのお尋ねもあらんが若し左樣なお尋ねもあらば道人ゝ之に答へて云はんとすナニ夫ゝ造作もない事で御坐る只これまで行はれし手紙の書方を改良するのみの事で御坐るとソコで又その改良ゝ如何なる事にするかと云ふに例へば物事を依頼して置たる事を問合せるあらば「過日お頼みヤして置ました何々の事ゝ如何成りましたか一寸お尋ねヤします」と斯云ふ風ゝ言語に發する通りを手紙に書ば其意味も解し易くその意味解し易ければ自から用向も早く便ぜるなるべく且つ男子より女子に送るも女子より男子に送るも決して差支へなかるべし然れども只言語の通りに書よと云へばとてクレハヤ何だんべエとか或ひゝ椅子の雛形を借て下ンしよあどと其方言を以て遣れてゝ却つて通用し難き事もあるべければ斯くするにゝ是非また一定の規則を設け無ければならぬ事あり而してその一定の規則ゝ如何するかと云ふに是ゝ道人が別に考案をめぐらしたる事あれど若し其工夫と新案を承まはり度とお望みの人あらば御傳授致すべし但し傳授料十圓ゝヤし受す）ソコで此處に其考案を略すれば所謂佛を作ッて魂を入れぬやうな譯あれど併し男女の手紙を同一にする事ゝ定めし諸君も御贊成あるべしイヤ夫さへ御贊成くださらば其方法ゝ御名々のお考へに任しても宜しきあり諸君の意ゝ果して如何

◎旅人宿の弊害

七八年以前までゝ宿引ある者ありて旅人とさへ見れゞ嘘八百を並べ立て旨く欺しこみ之を旅人宿に連行て何程かヅヽの割前を取り旅人宿にても亦た此の宿引を頼みて旅人を引ぎり込み若し此の旅人にして土地不案内の者あれゞ方外なる金錢を奪ひ取るなど隨分云ふに忍びざるの惡弊ありしが今ゝ其の惡弊も野蠻の一夢となり誠に結構なる事と思ひ居りしに此頃また諸新聞紙の報道する處に依れゞ田舍人が出京して旅人宿へ行とき其の車賃の非常に廉なるゝ旅人宿より車夫に酒手を出すに因る而して其酒手ゝ十錢以上二十五錢までなり云々道人ゝこれを讀んで又た一ッの苦勞種を求めたり尤とも新聞紙の報道する處ありとて强がち實説なりとも信じ難けれども若し此の報道をして實説なりとせゞ亦た是れ惡弊の再發と云はざるを得ぎ何となれゞ元來旅人宿の泊り賃あるものゝ大抵極りのあるものにて先づ一夜二十五錢より五十錢乃至七十五錢までを普通と爲す然るに其僅か二十五錢の客を引來りしが爲に、其の酒手として車夫に十錢を與へ七十五錢の客を引來りしが爲めに其の酒手として車夫に二十五錢を與ふるとすれば旅人宿の利益ゝ果して何れに在るや何しても勘定の合ざる次第にあらぎや然れゞ此の勘定に合ざる處の不足ゝ何れより補ひ來るべきかと云ゝゞ何處からも出處なきゆゑ是非とも何とか誤魔化して其客より取らざるを得ぎ若し然るときゝ其誤魔化される客こそ宜面の皮、初め安い車賃で心切に挽て來て貰ひしゝ宜けれど其の實ゝ矢張り自分の懷を痛めて高い車に乘たると同じ事にて取も直さず自分の嚬鼻輝で首を縊ると一般なり葱を貰つて軍雞を買ふと同意なり豈に馬鹿〳〵敗かぎりあらぎや道人ゝ旅人宿にして客より出す茶代の多少により其客の待遇に丁寧と粗末との差別をつけるの弊風あるのでさへ甚だ氣に食ゝず寧ろ茶代を廢すれゞ此弊害ゝ無かるべし

とさへ思ふに況て車夫を玉に造つて旅人を誤魔化すとゝ實に言語同斷の至りあり併しながら今日の旅人宿ゝ昔日の旅人宿にあらぎ上に警察の嚴則あり下に組合の規約あり或ひゝ頭取あり或ひゝ取締あり此の如き弊害ハ素より之あるべき道理あし否決して之あしと信ぎるあり然れども東京の旅人宿ゝ其數甚だ多し若し其多數の旅人宿中縱ひ一軒にても之ありとすれゞ善ゝ選り難く惡にゝ染り易く終にゝ一般の弊風となるやも計り難けれゞ其頭取或ひゝ取締にして猶ほ一層の注意あらん事を希望に堪へざるあり

◎學者と商人

學者商人を笑ッて曰く商人ゝ利に喩るとゝ古人の金言、世に商人ほど强慾の深くして手前勝手の强きものゝあらざるべし商人ゝ素より利によつて食するものとゝ云へ只私利を貪ぼる事にのみ汲々とし年箇年中私利に役せられ轉んでも只ゝ起ぬと云ふ主義あるを以て私利の爲にゝ親戚朋友の情交をも顧りみぎ甚だ敗に至ッてゝ親子兄弟互ひに反目して敵味方となる者あり其狀恰かも乞食の餓兒が一椀の食を爭ふが如し嗚呼商人ゝ人間の面の皮を被るのみにして其腹の中ゝ犬猫も同樣ある哉と商人ゝ又た學者を笑ッて曰く學者の不品行とゝ宜も穿ッた諺世に學者ほど面の皮の厚くして負惜みの强きものゝあらず正面より之を云へゞ學者ゝ物の道理を悟り自ら手本とおつて社會の人智を發達せしむべき筈あるに左ゝ無くして只口の先にのみ治國齊家の得失を說き或ひゝ法律經濟の利害を講じ其實際に至ッてゝ僅かに我一身だも滿足に脩まらずして借金取常に其門を襲ひ米櫃例も空然たり然るも猶ほ獅子ッ鼻を勃起して出放題の大法螺を吹散し愚人社會を瞞着して体宜く旨い汁を汲んと欲す其了簡の不潔き事恰かも裏店の掃溜に醉拂ひの嘔吐を打ッ掛たるが如し故に學者と交際すれゝ金を借られて損をする事あるとも決して德の行事あし嗚呼學者

はど厄介あものゝあらざるありと夫れ二者の言孰れを是とし孰れを非とすべき歟、道人ゝ素より學者にあらず去りとて又た商人にも非ず所謂洋犬にもあらざ狆にもあらざるの曖昧的なり今この曖昧的たる道人が岡目八目を以て行司の役を務むるときゝ東西孰れの方にも軍配を擧ずして只双方の眞中に突立ち先づ〳〵暫らくお二人さんと強て左右に引分んと欲す何とあれゞ則ち學者に限らず商人に限らず總て其極端に走ッて短所を拾ひ集むる時ゝ決して落度のあき者ゝあらず古人曰く君子の過ちゝ日月の蝕の如しと君子にして已よ然り況んや凡夫凡人をや殊に此多數の商人多數の學者あれゞ其多數の中にゝ義理人情に乏しき人もあるべく又た大法螺を吹て愚人を瞞着する人もあるべしと雖も僅か百中に一二あるが爲に是を以て全体に及ぼし商人ゝ斯々學者ゝ云々との角突合ゝ甚だ以て其當を得ざれゞありゾコで道人か此仲裁を爲すと同時に聊か二者に向ッて望む所あり何ぞや曰く商人ゝ利によつて食する者とゝ云へ餘り慾張て親屬知己の情交を欲の甚だ敗に至らざるやう學者先生ゝ又た只口先に小理屈を並べるのみに非ずして少しゝ俗身齊家の事を實行せらるゝやう即はち學者ゝ學者らしく商人ゝ商人らしくし一人の狡猾一人の不行跡を以て他の頭上にまで及ぼさざるやう注意せらるゝ事是なり諸君幸ひよ道人の仲裁を容れ賜ふや否や

此頃日永の徒然に何か面黑種にてもあらん歟と古本あど繙きて彼所此方と飛ぶに取調べけるに中に飛鳥川と名けし一編あり素より何人の作なるやゝ知り難けれども能く咀嚼れゞ中〻旨味のあるやうに覺えしまゝ聊か御參考の一助にも成らんかと道人が例の蛇足を添て諸君の御目玉にブラ下る事とゝ爲しぬ

◎飛鳥川

浮世をゞあられゞ有るに任せつゝ心よいたく物なおもひそ、變化盛衰

ん世の中の常むかしの劔も今ん薪割むかしの穢多も今ん平民クル〳〵廻るか浮世の機關然れば今斬らく時を得たりとて時に逢ざる人を馬鹿にするん馬鹿にするものが馬鹿なり縱ひ才智ありて發明ある人も時に逢んざれば空しく暮す者もあり又た左程の智惠ん無くとも其家に生れ其時に逢へば利口にも見え鼻も高く見ゆるものあり歌に「夏草のおのが時とや茂るらん霜に逢ふ日の秋もおもはで」高きも卑きも利口も馬鹿も泣も笑ふも苦しむも樂しむも皆是れ死出の旅路の道草あり塔の臺も破れた小家も皆おこれ死出の旅路の假の宿あり假の宿りに心を留め名聞利欲を明暮れて一生空しく路にさまよひ一大事の本道に出ざる旅人ぞ本意なけれ歌に「死ぬるのみ一大事かん人ん只生るあひだぞ一大事なれ」此の一大事ん神道で云へば唯一儒道で云へば一貫佛法で云へば第一義あり但し耶蘇にてん何んと云ふか知らず歌に「分のぼる麓の道ん多けれど同じ高根の月を見るかな」何れの道も修行次第歌に「煩腦も本ん菩提の證據にん澁柿を見よ甘ばしとなる」煩腦も菩提も澁いも甘いも樂屋ん元一ッあり例へば芝居の俳優にも上等下等のあるが如し上手と下手の違ひんあれども根んみな同じ俳優なり其また同じ俳優にて上等下等の違ひん修業を積むと積ざる熟すると熟せざるとによるあり歌よ「下手ぞとて我とゆるすな稽古だに積らば塵も山と言の葉」下等のペーペー俳優も力を入れて修業を積み功を積ば上等の名人にも至るべし志しが立ざれば何時までもペーペー俳優世に云ふ馬の後足なり歌に「人とかく生れける身の嬉しさをいたづらに爲す我が心かな」斯く云んゞ少し坊主臭けれども我が心から畜生にも成り餓鬼とも成り修羅道へも陷りて三惡道の苦しみに暇なく日夜明暮苦しめども其我が心ん如何あるものぞ何うしたものぞと考へもせず唯苦しみの世界とのみあきらめて苦しみを持前にする人あり是等ん糞溜の蛆虫が雪隱を世界として樂しみ井戸の中にドンブリコを

して大海のあるを知らざる蛙の如く安樂世界のあるを知らざるなり若し安樂世界を知らんと思へば現在只今見たり聞いたり立たり居たり寢たり起たり自山自在の出來る此身何が故に斯く働くぞ如何なる工合の機關ぞと先づ此處を知るべし人形店の人形へ働かねどあやつり芝居の人形へ御覽の如く自由自在に働くにあらずや人形芝居の人形が自由自在に働くへ人形遣ひの有れはあり人も亦た斯の如く寐たり起たり見たり聞たり寒さを知り暑さを覺え自由自在の出來る事へ人にも亦た遣ひ人あり人形の人形遣ひへ人の目に見ゆれども人を遣ふの人遣ひへ人の目に見えぬなり人を遣ふの人遣ひへ人の目に見えざるのみならず聲も香ひも無きものあり其の聲も香ひもなき處ろの人形遣ひを知り得るが一大事孔子の曰く生を知らぜんば焉んぞ死を知らんと一時の怠りへ一生の怠りと成る疾く目を覺して本道に赴くべし一生と聞けは永いやうあれども死出の旅路に極りへあり其日に當るやら明日が其日やら頓と知れず歌に「さくら花今日こそ斯くへ匂ふらめあす頼みがた明日の夜の事」若きとて頼みにあらず達者あるも當にあらず金も實も便りにあらず利口發明も間に合ぜ況んや名聞何の役に立たんや死出の旅我へ急ぐとへ思へねと一息〳〵行かぬ間あく盡るも夜も少しも休む間あく日も行き月も亦た行く歌に「昨日と云ひ今日と暮して飛鳥川あがれてはやき月日ありけり」水のサッサと流るゝが如く暫しも止まらず聖人も逝者へ斯の如きか晝夜を捨ずと宣へり凡夫の目にへ行とへ更に見えねども去年がッイ今年とあり昨日へ今日と流れ行く恰も船に寐て居るやうなものなり船が行とも覺えぜ其身も行くとへ思へねども今朝横濱を出れば明日へチャーンと神戸に着て居るか如し茶を呑む間も飯を食ふ間も行ずに居ると云ふ事へ些とも無い些とも行ぜに居る間へ無けれども何處へ行くとも白川夜船歌に「やよ如何に何處へ行くぞ若盛り知らぬ翁に身をばなしつゝ」昨

日乘りし竹馬ハ今日の枚とあり行き撫艶のある綉子の鬢も空に知られぬ雪とふり行く嗚呼今の我ハ先の我にあらず其のまた今の今も流るゝ飛鳥川夕べに道を聞ずして朝の露と消行んハ無下なる事ぞかし思ハずんばあるべからず

◎繪畫の必要

詩歌俳諧ハ風流の業にして只我心を慰さめさへすれバ夫で宜ものとハ云ひながら例へバ向ふ嶋の花を見て詩を作り龜井戸の藤を見て歌を詠じ一人で空店の蛭子見たやうにニコ〳〵して居た處が根ッから面白くもなきゆゑ是非これを他人に見せ昨日向ふ島へ行て斯云ふ詩を作つたとか或ひハ龜井戸へ行つて此樣な歌を詠だとか云つて他人と相語らざれば興味甚だ薄し然るに詩歌俳諧ハ人によつて好か嫌ひあり或ひハ解し得る者と解し得ざる者とあれは其好な人と解し得る人とハ之を見て感心もすべけれ話し相手にもなるべけれども其嫌ひ

な者と解し得ざる者とに至つてハトント話し相手に成らざるのみならず却つて毛唐人の寝言と爲す殊にハ如何に詩歌俳諧が上手なれはとて詩ハ韻字平仄歌にハてにをハ俳諧にハきれ字などの窮屈な規則があるが爲に自由自在に其趣きを述る事能ハず夫が爲め動もすれば酒を飲もせぬのに酒を飲だやうに作り鶯が啼もせぬのに鶯か鳴いたやうに有もせぬ虚言を交てお茶を濁さねは成らぬ事あり夫れ折角よき景色の處を眺め無上の快樂を感じながら其事を述ずして只虚言八百を並べるときハ縱ひ其詩歌俳諧ハ李太白定家卿及び芭蕉を壓倒する代物に至せ何の屁痴魔の役にも立ざるのみならず後日の參考にハなちざるなり然るに若し之を繪に畫ときハ實際の有樣を自由に顯ハして後日の參考と爲す事も得また誰に見せても通用と不通用等の不便もなく學問のある人ハ勿論縱ひいろハのいの字を右から書か左から書か知らざる權兵衛八兵衛にも其趣きハ一目して分るゆゑ誰で

も話し相手とあるべし猶は紀行の如きゝ文章の中へ詩歌を加へるよりゝ繪畫を加へて置く方が大いに宜しき樣に思ゝるゝゝおりゾコで道人が此處に引証とすべき一話あり道人が常に懇意にする某家に一人の小兒あり其歳を聞ば今年今月にてヤット二年と八ケ月との事あれば言語ゝ猶は未だ熟せず此頃漸く片言交りに父親さん母親さんが言へる位ゐなり然るに其三歳にも滿ざる乳呑兒が一日の事手に煎餅を持てポチリ〳〵と嚙りながら其前へやまと新聞を廣げて其煎餅を打ツ缺き挿繪の上に並べて伯母チヤンもお食よ伯父チヤンもお食よ姉チヤンも赤チヤンもと一ッ〳〵其口の處へ持て行て載て居たり道人傍らより之を見て成わど小學校の教科書に圖畫が書入てある筈だ彼樣お乳呑兒の眼から見てさへ男ゝ男女ゝ女娘ゝ娘赤ン坊ゝ赤ン坊と見え又た物を食させるにしても目や鼻へゝ持て行ずしてチヤンと口の處へ持て行のゝ奇妙なものだと感心せり併し是に感心したるが爲に急に繪畫の必要を感じ繪畫最負となりし次第にゝ非ざれど世間の人を見るに繪畫と云へば只畫工にのみ委ねて敢て顧みざるの有樣あれども是ゝ決して畫工にのみ委ぬべき者にあらず縱ひ素人たりとも少よゝ學んで置いて宜きものかと存ずゾコで極つた文句あがら諸君ゝ如何おぼし召すや

◎學者の不品行

學者の不品行醫者の不養生易者身の上知らぜ是ゝ古來より稱する厄介者の三福對なり而して此の三福對の中にて醫者の不養生ゝ近頃大いに其体面を改めたやうに思ゝれ又た易者の身の上知らずゝ近來如何か知らねど是ゝ先づ何うでも宜しとして唯困るのゝ學者の不品行あり尤も當時の學者先生ゝ悪く〳〵品行方正にして何處に一點の打處ろもないとした處ろが是から學者の看板をかけて明治の泰平海へ乘出さうと云ふ人則ち學者の卵先生を見るに何とおく行末が案じられる

様な心地するあり何故あらば一寸リーダーの二三ページも讀むか飜譯書の五六枚も讀むとモウ大學者にあつた積りでズット高く止りオイ君イ法律に正條なき者ハ其罪を論せずサ人よハ運賦天賦の自遊と云ふものがある親父の財布へ手を突ッこんで紙幣を引張出せは取りも直さず窃盗犯を免がれないけれども母親を誤茶魔化して臍繰金を紋り出すのハ決して詐欺取財の罪にあらずサ何だい是から自遊の運動と出掛けやうかとか或ひハ新聞の社説が何うか斯うか噛碎けるとか或ひハ受賣演説の前座でも叩けるやうになると無暗に獅ッ鼻を勃起して今度の總理大臣ハテッキリ僕に來るだらうと思ッて居たら又〻某伯を用ゐるとハ實に慨嘆の至りだ彼の韓退之が千里の馬ハ常にあれども伯樂ハ常になしと愚痴を溢したのも尤も千万の譯だ現政府ハ人材を登用するの精神に乏しいから困るあどと途方途徹もあい大法螺を吹てベチャクチャ饒舌るのみなれは縱へ法律學を卒業したに

致せ政治學に達したに致せ學問をした功能ハ爪の垢ほども見えざるが如し或人の話しに書物を讀んだ者ハ只空ッ口を饒舌るばかりで何の裏の益にも立ざれど書物を讀まざる者ハ却つて善事を行ひ善言を發すと云ひしが如何樣其邊のトンチンカンもあるかとも思はるゝあり故に此學者の卵先生にお聞せヲし度きハ三才因緣辨疑と云べる書中に學文の奥儀と云ふハ心正直にして曲らぜ己れを高ぶらず人を侮どらず柔和にして人と爭そはず貧人を憐れみて富貴に諂はず老を敬まひ幼を慈くしみ己れを謙遜りて人を貴び怒りを押へて物事に堪忍つよく誠ありて僞らざるを道を行ふの至極とす人の學德學才と云ふハ心を丸くして角あらぜ人に交はるハ水の流れに隨ふが如くあるを德と云ふ然るに世間の學者を見るに博學にして廣く事を知りあがら或ひハ不孝或ひハ不忠人と交はるに僞り多く高慢にして他人を侮り心み角ありて假初の事にも人と爭ひ慾深くして富貴の人に諂ひ我業

を怠って身をさまらず此の如きの類世間に多し是等の人ゝ縱ひ千万卷の書物を讀たりとていろは四十八文字を知らざる者に劣れり云々是れゝ誠に動すべからざるの金言あり然れども道德を度外にして居る人々ゝ何だべラボウな孔子が寐耄て戸惑ひを玄たやうな珍紛漢を云ふあ其樣な手ぬるい事で此の活世界の開化道中が出來るものかと云はれるか知らねど如何に活世界だからとて開化道中だからとて書物を讀んで高慢痴機な事を饒舌れよ小理屈を云つて親父に頭を下げさせよ何處でも彼處でも手の届くだけゝ金を借り盡せよ若し人が何とか云へゞ直に叩きあぐッて仕舞へよと云ふ理屈ゝ決して非ざるべし故に書物を讀んで學者だとか博識だとか云はれ度人ゝ常に品行を正しくして彼の三福對の仲間に算へらるゝ事あかれ……失敬

◎理髮床に迷ふ

健康に害あるものと知れゞ猶ほ垢付きばかり愛きものゝなしなるは

と其の通り身体の汚れて眞黑黑々々助稻荷に魅まれたのか但しゝ舶來の黑ン坊か乃至また黑狸の親分かと云ふやうでゝ誠に以て爺無妻ものゆゑ成らう事あら朝晩に一度ヅヽ湯に這入つて其歸り掛けに理髮床へ立寄つて頭髮の手入れをして髯を剃ッてプン〳〵と香水でも匂はせて夫れから木綿衣物ありとも毎日汗臭くあい着物と着替へてエヘンと咳拂ひをしてキチンと坐ッて居れゞ人前も宜し自分も心持ちの宜いものとゝ素より承知して居あがらサウ口の先で云ふやうにゝ中々行かないものなり殊に道人あどゝ無精者の共進會でもあれゞ一等賞の直打ゝ必らずあるものにて入湯ゝ一ケ月の中に一度か或ひゝ二ヶ月に一度ぐらゐ頭髮の掃除と來たら盆暮の二期に一度ヅヽすれゞ先づ〳〵上出來と云ふくらゐゆゑ左あがら唐獅子と黑狸とを合併したやうあ色氣のあい体裁あり然る處ろ追々暖氣になるに就いてゝ唐獅子頭も少しうるさく成りしゆゑ先づ四五錢奮發して頭の掃除

でもせんものとガラにない粧飾の氣を生じてブラリと自家を飛出し甲處乙處と理髪所を探して這入らんとすれば其看板に薙髪所とあり道人以爲らくオット漫りに飛込むべからず薙髪とあるから人を坊主にする處ろに相違あしイヤ坊主にされてゝ少しく閉口せざるを得ずと矢庭に此處を去つて又た一二丁行けば此度ゝ調髪所と云へる看板を見る道人又ゝ以爲らく調髪とゝ髪を調べると云へる意味か將た髪を調べると云ふ意味か調へると解釋を下せば髪を拵らへる處ろ調べるとすれば髪の毛を一本ヅヽ改ためる處ろイヤ何れにしても道人の飛込むべき處ろにあらずと此處を去つて又た一二丁行けば今度ゝ整髪所と云へる看板を見る道人又候以爲らく整髪とゝ髪を整すと云へる意味あるか又たゝ髪を整へると云へる意味なるか何にしても厄介あ處ろ是れも亦た道人の行くべき處ろにあらずと又た此處を去つて一二丁行けば今度ゝ粧髪所と云へる看板を見る道人又ゝ以爲らく髪

を粧ふとゝ如何なる化粧をする處ろあるか判斷つき難し是も亦た道人の這入るべき處ろにあらずと又た此處を去つて彼處此處と歩行し に或ひゝ散髪所と云ひ或ひゝ斷髪所と云ひ或ひゝ剪髪所と云ひ或ひゝ苅込所と云ひ或ひゝケキリ所と云ひ或ひゝ何と云ひ艱と云ひ道人の如き無學者にゝトンと呑込ざめるが故に只無茶苦茶に足を摺木にして探したる處ろ某處にタッタ一軒理髪床と掲げたる看板あり道人是に於てかヤットコサと頭の手入れを爲す事を得たり因つて順番を待つの際親方に問ふて曰く余ゝ今日數十軒の理髪床を尋ねたり而して其体裁ゝ理髪床に似たれども其看板を見れば坊主よするものゝ如く髪の毛の勘定をする者の如く化粧をする者の如く散し髪にする者の如く種々様々なるに迷ひしが彼ゝ全体何をする處ろなるぞ親方答へて曰く貴方も亦た馬鹿正直の人あるかあ元來政府よりのお達し面なぞにゝ理髪床又たゝ理髪職と書てあるゆゑ看板にも理髪床と掲ぐ

るが本統なるべけれども只理髪床でハ面白くおきゆゑ薙髪調髪粧髪おどと色〻に書きし次第にて早く云へば面白半分の看板なり若し貴方の仰しやる通り看板ばかりを當にした日にハ彼の經濟混燼の經濟を輕濟と書き食鹽と書けば夫れで宜いものを御丁寧にも食鹽じはと書た看板の類も隨分澤山にあれど輕濟と書てあつても損の行く事とも思ハず食鹽じはと書てあつても敢て重言とも思ハず買に行く人ハ矢張買に行ます然れば看板なんぞハ少し位間違つて居たッて宜でハありませんか嗚呼學者と云ふものハ不自由なものたと道人曰く親方も隨分野ッ氣だッウ

◎自負心ハ事業を達するの基

自負と云ふハ俗に云ふ自慢の事であるが、諺にも自惚と瘠氣のない者ハ無いと云ふ通り自負の心と云ふ者ハ誰にでもあるべきが當然の事であるから凡そ此娑婆世界へ稼ぎに出て來た人間ハ飯と菜ッ葉と魚類とを食ッて湯茶を呑む者と麪包と肉類を喫食てッップを呑む者とを論せず、百人の中で九十九人半までハ皆な自負心がある、若しも人間の皮を被ッて居りながら自負心の無い者があるならば、夫ハ必らず碌でなしの怠惰者か左もなくば必らず活智のない奴即ハち穀潰しの大ベラボウである、而して道人が何故に又斯く云ふかと云ハい、若しも人間が皆な碌でなしの怠惰者や活智のない穀潰しの大ベラボウであつたならば、何を以て能く一世の事業を達するであらうか、決して一事一業ハ扨置て三度の飯も腹充分に食ふ事ハ出來ないであらうか、シテ見ると人間が能く大業を達し洪志を遂る所以のものハ只一ッの自負心があるからである故に自負心ハ一身を保持するの本家本元と云ふも強ちコヂ付け理屈でハあるまい爾して何をか一身を保持するかと云ふかと云ふに、曰く自負心と云ふものハ元來敢爲進取の勉力に生じ、イヤ是でハ餘り堅過るが早く云へばナーニ此位な事ハ河虎の屁玉だ自己

が道やァ朝飯前に遣て見せる自己がウシと一ッ力瘤を出せバ必らず爲し遂ずして置くべきかと、能く吾精神を慰撫し能く吾勉力を鼓舞し自ら吾心に餘裕を與へて屈したり撓んだり倦たり厭ふたりするの心を生せしめざるものである、腹の中に餘裕があれバ思ひにも必らず餘量がある、思ひに餘量があれバ業として成らざる事なく志しも必らず達しあい事ハない彌々進んで彌々大いに愈々振つて愈々作り能く燕雀の小志を棄て鴻鵠の志を抱き以て一世に高翔するの洪志を發せしむる者ハ則ち自負の力である、人にして若し此力がないならバ必らず氣死し力亡びて卑屈に安んじ活智無しに終るであろう併しなから一利あれバ一害で自負心ハ又た傲慢心を生じ易く動ともすると自負心の跋扈に因て一世を誤る者があるから是ハ愼しまねバならぬ、ソコで自負心が若し傲慢心と化ると夫から又た忽ち侮慢心と云ふ奴を生じ侮慢心が生ずると我才に誇り我智に驕つて一世を睥睨し知らず識ら

ず強勉心をして怠惰に陷らしめ遂に其身を誤るやうな事か出來する、故に能く事業を達せしむる者ハ自負心能く身を誤らしむる者も亦た自負心である然るに世人ハ此自負心を支配する事が出來ずして兎角に傲慢に陷る者が多いに因ると云ふと是非又た傲慢の謙釋が必要にあつて來るが夫ハ又た申し述やう……オヽ暑い

◎轆轤首の話し

昔し或處に轆轤首の男あり此男一たび首を伸すときハ淺草の十二階よ登りしより尙高くして遠隔の地も目の下に見渡し猶望遠鏡を用う時ハ富士の山に蟻が集會して居るのも筑波山に蜉蝣が喧嘩をして居るのも事細かに見えるとの評判あり故に此男常に人に逢毎に自かち誇つて曰く凡そ五大洲中廣しと雖ども我如き調法な首ハ他に一人もあかるべし他に一人も無けれバ我ハ全地球に只一人あり汝等知らずや一寸この首を伸すときハスペンサーの風船に盡飯の辨當を届け

な位な事ゝ朝飯前の仕事にして咽の渇く時ゝ天の河の水を呑むと恰かも汝等が手桶の水を呑が如く天の雨なき時ゝ我唾を以て間に合せる事あり空に風なき時ゝ我鼻息を以て代用する事あり然れば地球上の國土山川草木の如きゝ眼下に見下して何國如何なる津々浦々まで も見えざる處なし然るに汝ぢ等ゝ井底の蛙雪隱の蛆虫同樣にて我見る處の百万分の一をも見る能ゝざるゝ誠に以て不便且つ可哀想と謂ふべしと口から出任せの嘘言を吐て自慢せり一日の事この男の知人某が傍らに在て之を聞き成るほど君の首ゝ頗る調法あり願はくゝ今その首を伸して眼力の及ぶ處まで見渡し其見たる有樣を語り聞せよと云へば轆轤首ゝ益々くづ圖に乗て夫ゝ何より易い事ありと直樣其場に立て後の蒸滊ポンプの管の如き首を一生懸命に長々と繰出して四方八方を眺め又例の出鱈目を饒舌り出し嗚呼面白い〳〵英佛獨米いずれの國の景況にてもお好み次第イヤ巴里ゝ巴理だけあつて素敵に長たらしい鐵道線路を敷てんだハテ彼ゝ何だらうゝ分つた〳〵英國の國會議員が懇親會を開いて居るのかハヽーフヽンナール程これゝ愉快〳〵汝等ゝ此樂しみを知らずして只芋虫同前に日を送るとゝ實に憫然の至りだ儘にあるあら家鴨の首でも繼で遣度いなどと頻りに法螺を吹て威張るゆゑ其知人も流石に立腹し默止て居れば餘りに惡き高言なりと行成り其男の兩足をとつてヅドンと其處に打倒し彼の長たらしき首に跨りて汝轆轤首よ汝ぢゝ全地球を一目に見る程の云れ者でありながら此の芋虫の如き者に足をとられて打倒さるるも知らぬとゝ如何ある故ぞと詰りければ轆轤首ゝ顔を云かめてイヤ我ゝ全地球を一目に見下すと雖も悲しき事にゝ我首の高く伸るに隨ひ肝心の足本が遠くありて見る事能はず汝ぢゝ遠き處ろを見る事能はざれども近き足本が見ゆる故に我に勝しあり嗚呼我誤てり〳〵今にして之れを思へば汝ぢが如く文盲たりとも足元の見ゆる方大いに我に優

るなり我ゝ縦ひ西洋諸國を一目に見るも足本が遠くして見えざるか爲に斯る耻を掻きしなりとで頻りに後悔おせしとかや此話し誠に馬鹿らしき話しと雖も世にゝ遠き西洋諸國を丸呑にしたる博學多才の人にして一國の事を兎や角と饒舌れど我一身の足本に氣の附かざる人もあり或ひゝ多藝多能にして遠き昔しの古實を何の難のと口にすれども近き足本の家業に暗き人もあり其外種々様々の朧輪首多くして我足本を見る者ゝ昔しも今も甚だ少なし注意せざるべけれや古人曰く自ら伐る者ゝ功なく自ら矜る者ゝ長せずと宜おるかな

◎漫筆物が世に出たに就て

さくら花けふこそ斯ゝ匂ふらめあな頼みがた明日の夜の事如何さま世の中の榮枯盛衰と云ふものゝ奇妙奇手列の機關おり日々新たに又た日に新たにある今日、その引合に出すものゝ數限り無けれど先づ自分の職業上の事に就て申せば、一旦火の手の強かりし赤本類も如何なる風の吹廻しにや、此頃ゝズット下火とおり其名代としてソロッロ頭を持上て來たのゝ、一旦屑屋の籠へ押込られた漫筆物とゝ、イヤ世の中ゝ實に不可思議の廻り燈籠で御座る、トコロで道人も何がな一ッ堀出し物を生捕て人の鼻面を相撲を取度ものと、皿のやうな眼玉を丼鉢ほどにして甲處の古本屋乙處の屑問屋を探し歩行ど元々當のない探し物なれバイクラ探しても見當る氣遣ひもおし良んバあつた處が活馬の眼を抜く先生達に遠くの昔し先鞭を着られて、殘ッて居る物ゝ目方の輕重によつて直段を定める古雜誌ばかり是とても屑々(デハナイ)グッ〳〵して居る中に書林さんが餡詰の用紙に持て行て仕舞様子、是ゝ困ッたものだと思案投首しは〳〵と本箱の掃除をすれバ中から出たのゝ桃太郎おらで虫の食た古本一冊此奴ゝ占た種ゝ近きに在り然るに之を遠きに探じたるゝ道人の失策、下司の智恵ゝ跡から出ると滿面に喜色を帶て(モ少し大業だが)ニコ〳〵顔で指に唾きし其の一二行

を讀み下せゞ(前畧)火の元に注意せざる者ゝ火難の相あり川遊びを好む者ゝ水難の相あり先祖傳來の家業を嫌ふて務めざる者ゝ人の養子となり又た人の奴僕となるの相あり、心多き者ゝ女房度々替り住所職業定まらず物事成就せざるの相あり、藝娼妓に現を拔す者ゝ女難あつて破産の相あり、不孝不悌にして家業を怠たる者ゝ一生涯困窮難儀するの相あり不忠不義なるゝ子孫斷絶の相あり氣隨氣儘ゝ親兄弟の仲あしく人と交りを破るの相あり大酒淫亂なるゝ短命にして家を失ふの相あり謀叛を企てる者ゝ一旦榮ふるとも終にゝ身を亡ぼすの相あり、短慮短氣ゝ常に家内和せず人と爭ひ絶ざるの相あり、奢りゝ家を亂すの相あり、吝きゝ人に憎まれて子孫長久せざるの相あり、名聞好の者ゝ人より恥辱を蒙むるの相あり、親に孝行にして家業を勉强する者ゝ子孫繁昌長久の相あり、身を慎みて誠ある者ゝ人に敬はれ一生禍を受ず家をよく治むるの相あり、正直にして慈悲心の深き者ゝ他人の親みを受て幸福を得るの相あり、儉約をつとめて怠らぬ者ゝ富貴の相あり、常に油斷なき者ゝ一代借金をせざるの相あり、身の養生を第一にして飲食を慎む者ゝ長壽の相あり、云々道人磴と膝を打て曰くハヽー此奴ゝ益(易)の本らしいワイ、とゝ何だか落し話しのやうな話しあり

◎虎列刺の豫防法

ソレ御覽じろ、然から道人が云はゞい事ぢやない、サア御用心ゝ是からだ、シツカリ嚔鼻輝を〆てお掛り成され、各地方でゝ已に澤山ある樣子、イヤ各地方ばかりでゝ無い、現在東京の市中にもポツ〳〵始まつた樣子で御坐る、何が〳〵何が始まつた何の爲に嚔鼻輝を〆るのだ、若し越中の人があつたら何する、西洋嚔鼻輝も……是ゝシタリ悟りの惡いコヽヽ虎列刺〳〵、虎的がソロ〳〵頭を持上て來たから御用心をさしやれと云ふ事サ何だ忙慌く、さつて馬鹿〳〵敷、コレラと火事が怖くつて此廣い東京に居られるものかいゞランメー、ソレそれだから困る、

何も怖がらッしやいの震へさッしやいのと云ふのでゝ無い、只御用心を成さるが宜しいと云ふので御坐る、云ふので御坐るが聞て呆れらァ、イクラ虎列刺か遣て來やアがッて、冷奴子で燒酎の五ン合も飲了りやァ虎列刺の方からへイ左樣ならだ、ナニ冷奴子で燒酎を五ン合…滅相もない其樣な亂暴だから因る、冷奴子で燒酎の五ン合も飲だ日にゝ、虎列刺の方からへイ左樣あら處か、猫に鼠を見せるやうなもので虎列刺がニコ〳〵顏で尻尾を振て遣て來る全体其樣な亂暴あ人に對して、虎列刺の原因や豫防法を講釋するのゝ、チト野暮あ話しか知れないが、是も持たが病ひ道人の一癖だから仕方が無い、マア何も放樂と思ッて聞ッしやれ元來虎列刺病と云ふものゝ一種の虫だ、バチュルスと云ッて極々微細あ虫だが是ゝ顯微鏡で見れゞ能く見える、ソコで此バチュルスと云ふ奴ゝ何處に居るかと云ふと、ナニ何處と云ッて極りゝあい即はち前に云ッたやうあ亂暴あ人が、冷奴子の豆腐で燒酎を五合飲

だり、或ひゝ菓物ゝ御坐れ魚ゝ御坐れ鮓ゝ御坐れ蕎麥ゝ御坐れ汁粉ゝ御坐れ酒ゝ御坐れと無暗矢鱈に喰込だり或ひゝ少しプンと腐敗た奴を無茶苦茶にやらかしたりすると直に腹の中へバチュルスが湧て例の通り嘔吐下痢をする是が即はち特發の虎列刺、夫から又た其特發の者が嘔吐下痢をすると其中に彼のバチュルスが混交て居る處で又たバチュルスと云ふ奴ゝ奇態あ虫で其處へ出ると直に地の下へ潛り込むものだ地の下へ潛り込と地の下ゝ水かあるものだから其水に連てヒョロ〳〵〳〵と何處までも流れて行く其流れたのが井戸にでも這入て居るのをツイ浮々と飲と、其人が直に虎列刺にある是が即はち傳染だ、然から虎列刺病と云へゝ怖いものゝ樣だが、何も空氣の中に毒が交ッて居るの或ひゝ毒虫が飛で來て咽へ這入のと云ふ譯でゝない、只バチュルスの仕業であるから此バチュルスの防ぎさへ附れゞ虎列刺にある氣遣ひゝ無いのだ、ソコで此バチュルスを防ぐにゝ何した

ら宜かと云へバ、バチュルスハ火に掛て煎さへすれバ直に死で仕舞ふものだから、何でも一旦煮た物を食ふやうに又た水を飲ずに煮立た湯茶を飲むやうに、夫から又た暴飲暴食を仕あいやうにして居れバ先づ大抵ハ大丈夫だ、尤も是ハ立派な醫者様に聞た説だから道人の出鱈目と同一視し給ふな、まだ此外にも色々豫防法ハあれども夫ハ其時に當ッてお醫者さんに聞給へ、道人が御用心をさッしやいと申すハ先づ大略此の如し

◎東京人の物好き

奇を好むハ人情の常敢て怪しむにハ足らぬと雖も凡そ東京人ほど奇を好む者ハあらざるべし例へバ腕車が引繰返つたと云へバ之を見んと欲し馬車の馬が打倒れたと聞けバ之を見んと欲し酔漢が轉んでも直に駈出し乞食が踊つても直に飛出し或ハ犬が喧嘩をしても猫が欠伸をしても一人是を報ぜれバソレと云さま小僧も駈出せバふ三も飛出す併その小僧が駈出しふ三どんが飛出すハ猶可なり甚だ敗に至つてハ主人も駈出し番頭も飛出し或ハ細君乳母子守まで眼を丸くし息せき切つて其先を爭ふ事恰も腐敗た飯に蠅が集り梨子の心に蟻の群るが如し而して其留主にハ畫鳶が來て衣類物品を盗み去る等の事往々にして之ありナント馬鹿氣た次第ならずやト斯く云ハゞ針小の事を棒大に觸散らかすに似たりと雖も道人ハ決して左様なふ負を云ふに非ず若し是を虚言だと思し召すお方あらバ試みに半日の隙を潰して東京市内を巡り見られよ必らずや後處に一群此處に一群れウヨ々々として坊主頭を振立て査公の大喝一聲に逢つてバラ〳〵と散乱するあらん而して其先を爭ひ査公に劍突を食ハせらるゝを知りながら坊主頭を振立て怖々見んと欲する處ろの者ハ何ぞと云ハゞ概ね車夫馬丁の鑑札調べか左もなくバ酔漢迷兒の類に外あらざるを夫れ然りか然るが故に此奇を好むの人を餌として無暗に濡手で粟の金儲けを爲

さんと欲する野師あるものあり或ひハ三毛猫に太皷を縛りつけて雷の居候らふと稱し或ひハ鯰に瓢簞を脊負せて地震の生徒と唱へ或ひハ豚を以て大人國の蚤と云ひ或ひハ鼠を以て小人島の猪と爲し或ひハ何んと云ひ彼と云ひ事大業に觸れて木戸錢を奪ふの類甚ハだ多し今其一例を擧て假聲を遣へバ曰くサア入ッしやい〳〵評判〳〵〳〵此處に御披露する化物ハ西洋の赤髭國から生捕て來た世にも珍らしき大化物で御坐い先づ其容体ハこの看板の通り面の皮が眞黑くろ助で目も鼻もない唯大きな口が一ッあるばかりで人が見れバ屹度笑ふ事請合と云ふ世にも珍らしき大化物サア入ッしやい〳〵見るハ一時話しハ万古末代中錢あしの木戸ハお歸で宜しいサア評判〳〵〳〵と其吐鳴り方の旨き事左あがら正眞僞りのなき化物を取捕まへたるが如し因て一錢を投じて之を見れバ何ぞ料らん只一個の長靴あるはゞ面の皮が眞黑で一ッの口あり人が見れバッッ〳〵と笑ふにハ相違あきも餘りと云へバ餘り馬鹿氣た次第あらずや而して此頃また一奇話を傳ふる者あり曰く上野不忍の池中に異樣の蓮を生じ其葉の大いさハ綠日商人の日傘も啻ならず殊に其花ハ紫色にして四斗樽の大いさ程あるとの大法螺一たびお先走りの耳に入るや忽ち東京中の大評判となりソレ行けヤレ行けと權兵衛八兵衛もゾロゾロ出掛るが爲に其最寄の飲食店などハ思ひ掛あき金儲けを爲したりとの事あり而して其異樣の蓮ハ全く他に類なきものかと云ふに如何さま東京にてハ餘り見ざるやうあれども地方へ行けバ俗に鬼蓮と唱へて隨分澤山ある品ありソコで是まで東京にあき鬼蓮が何故に又た突然生じたるかと云に諺にも蒔ぬ種ハ生ぬと云ふ通り種あくして自然に生える道理なけれバ是ハ必らず山師の策略にて何時の間にか其種を蒔き之を奇貨として不景氣の中に旨い汁を吸んと計りしものに相違無るべしと信ず嗚呼旨哉山師先生の計略嗚呼奇なる哉其罠にかゝるの人

◎美人とは如何なる者ぞ

美人とゝ如何なる者を云ふか只その文字によつて解釋を下せゝ強が
ち婦人をのみ稱するの語にゝ非ずして男子たりと雖も其顏美なれゞ
即ち美人と稱して差支へなき筈なり然るに美人とし云へゞ三歲の童
女も縹致のよい女と悟り殊更に男女を區別せんとして女の美人と云
へゝ人を馬鹿にしたとか或ひゝ重言だとか笑ゝるゝまでに至りたる
ゝ恰も義士の名を大石氏に奪ゝれ黃門の名を光國卿に奪ゝれたると
一般の有樣嗚呼女の威勢も亦た豪氣あるものある哉夫れ然り美人と云
へゞ己に女の事と極り居る以上ゝ今更に野暮な理屈ゝ申さゞれども
併し其美人とゝ又た如何なる婦人を指して云ふかと云ふに美人ゝ素
より一定則のあるものに非ず即ち肥て美人なるあり痩せて美人なる
あり色白くして美人なるあり愛嬌によつて美人なるあり丸顏にして
美人なるあり長顏にして美人なるあり皆人の見る處により又た人の
好不好に依て異ありと雖も併し世人が美人と稱するゝ概ね面長にし
て色白く口ゝ大ならず小ならず鼻高からず低からず眉濃からず淡か
らす体格も亦た肥ならず痩ならず脊ゝ中脊にして額の生際に富士山
を描き眼睛涼やかにして何處とおく愛嬌を含み猶ほ言語動作等に至
るまでも柔順なる者を指して美人と爲す者の如し然れども道人と世
人と一風違ひ如何に色白きとて如何に愛嬌ありとて彼の外面のみ著
薩なるを以て決して美人とゝ爲さず縱ひ其容貌ゝ般若の如きも其体
格ゝ餓鬼の如きも其心美なれば即ち之を美人と爲さんと欲す世の鼻
下長先生以て如何と爲す

◎人を使ふ者の心得

人心の異なるゝ猶ほ其面のごとしとやら成るほど十人寄れば十色百
人寄れば百色千人ゝ千人一万人ゝ一万人皆その顏付の違ッて居るは
と了簡方も違ッて居て中にゝ火事場の混雜中に落付拂ッて文久錢の

小面倒臭い勘定をして居るやうな氣の長い人もあれば又た中にハ朝東京を出て其晩直に大坂へ着する迅速の滊車に乗ながら猶ほ遲い〳〵〳〵レ込で果ハ自分で後押を仕やうと云ふ樣な急性の人もあれと併しお金を澤山に持て榮耀榮華に笑ッて暮し度と思ふのハ誰でも同じ事又た毎日〳〵借金取りに責られて泣て暮すのハ嫌だと思ふのハ是も誰でも同じ事砂糖ハ誰が甞ても甘し唐辛子ハ誰が嚙ッても辛し然れば自分の好む所ハ他人も好み自分の嫌な事ハ他人も嫌だと云ふ處を能く考ふへし若も人にして此情を欠き他人ハ何でも好い熱からうが寒からうが餓え死うが苦からうが其樣な事ハ河虎の屁とも思ハない只自分さへ熱くなく寒くなく旨い物を食ッて面白く暮せバ夫で好、と云ふが如き根性ッ骨でハ是ハ思ひ遣のないと云ふものにて迚も世間の人と交際が出來ぬのみならず人の風上に立て人を使ふ事ハ出來ざるなり何故また人を使ふ事が出來ぬかと云へバ苟くも主人たる

べき者が其樣な思ひ遣のなき人でハ之に使ハれる奉公人ハ決して歸服せず或ひハ歸服して居るやうでもホンの上邊バかり只休裁にへイ〳〵ハイ〳〵と天窓を下て居るのみにて其内心に至ッてハ糞でも喰へと云ふ了簡を持て居るゆゑ主人がイクラ嚙潰すほど小言を云ッても其小言が爪の垢ほどの益にも立ず啻に益に立ざるのみか其小言の爲に飛でも無い事を仕出かして暗に損毛を掛るやうな事がある故元來人に使役れる人間と云ふものハ世の諺にも奉公人根性と云ふ位なれバ並の人間とハ丸ッ切り了簡方が違ッて居て例へバ夜ハ一時間でも早ぐ寐たがり朝ハ三十分でも餘計に寐たがり其外起居振舞も丁寧なるを窮屈がり又是れを敎て遣バ脹れッ面をするし冬ハべラボウに寒がり夏ハ滅法界に熱がり兎角ハ骨惜みをして大抵なら手足を動かさない算段を考へ爾かと思へバ手前の勝手に就てハ犬猫の嚙合にも飛出したがり或ひハ撮み食ひ大欠伸居睡り戸障子の明ッ放しなど

十々勘定をした日にハ何一ッとして主人の氣に入る事ハ無きものなり故に斯樣な横着奴を使ふ人ハ餘ほど思ひ遣と云ふものが無けれど一日半時も使ハれる者よハあらず去とて是を矯正さうとするも容易な事でハ直らざるゆゑ之を直すにハ右の思ひ遣と云ふ事が專一なり先づ早い話しが一寸用を命令ても三度に一度ハ誉ても遣り(世に云ふ飴を嘗させるなり)又た時としてハ言葉を和らかにして教ても遣たりして漸々と曲りを直し氣を長くして使へバ何時直るとも無く自然と善き方に遷ッて終にハ主人の教ハ有がたい者だと考へが附くときにハ彼奴にも思ひ遣の了簡が出來て是も主人の爲め彼も主人の爲と万事万端に蔭日向なく働らくゆゑ主人の利益ハ實ハ莫大なり又斯の如くなるに至ッてハ主人の方に於ても其志ざしに感じて默止てハ見て居らず必らず夫れ相應ハ其報酬を爲すゆゑ相互ひに和合し初めて商賣も繁昌し家も丸く治まるに至るべし

◎奉公人諸君よ

奉公人諸君ハ現在の米相場が一圓に何程するか御承知なるや諸君ハ此世世間の景氣ハどんな鹽梅敗か御承知なるや諸君ハ目下の金融ハ如何なる有樣か御承知なるや道人察するところ諸君ハ人の飯を只食て居る結搆な身分ゆゑ米相場も世間の景氣も金融の善惡も更に御承知なき樣よ存ず其証據にハ此世痴辛い世の中に主人が彼是と心配するにも拘はらず諸君ハ呑湖の酒蛙突く面白半分にて日を送り兎角に樂をするを好んで骨を折るを嫌ひ殊に此節ハ鵜の眞似をする鴉鳶が飛べバ鳩が飛ぶとやらの諺の通り何だか三百代言が熱にでも浮されたやうに義務が何したとか權利が何だとか或ひハ依頼心が何とかで獨立心が何だとか頻りに生意氣な事を饒舌繰て主人に使はるゝを不愉快に思ふやうな有樣なれど左程に骨を折るのを嫌がり主人に使はれるのを面白く無いと思ふならバ最初から奉公をせぬが宜し元來奉

公とゝ公に身を奉つると書なゞ古風な講釈を擔ぎ出すまでの事ゝ無く已に奉公と云ッて主人に身を任せ自分も一勉強するの目的で其家へ奉公せし以上ゝ何事も主人の命令に從ひ能く働らき能く稼ぐべきゝ勿論の事なり併しながら一旦奉公を去たからにゝ其主人が何様な無理無法な事を云はうとも又た如何なる苛酷な取扱ひを仕やうとも唯へイ〳〵ハイ〳〵御無理御尤も樣で涙を溢しながら其主人に仕へよと云ふにゝ非ず若しも主人が無法な事を云ひ苛酷な取扱ひを爲し如何に我慢をしても我慢が出來ずどうしても勤まらぬと思はゞ身体ゝ元々此方から持て行きしものなれゞ尻に帆を掛けるとも後足で砂かけるとも其處ゝ勝手次第にしてサッサと暇を取つて歸るに如ず敢て無駄骨折するにゝ及はざるなり若しまた左もなくして眞に奉公する氣ならゞ下らない愚痴を溢さずに勤むべし而して又た神妙に勤むる氣ならゞ主人の物を誤魔化さず又た我儘を慎しみ或ひゝ早く家を持て我身代にして暮し度いなど決して思ふべからず尤も主人も親も離れて獨立の出來る人間ゝ此限に非ずなれども先づ十人の中で八九人までゝ主人と親の力を借るにあらざれゞ世間の人と肩を並べる事ゝ六ヶ敷ものなれゞ奉公をして居る中ゝ能く主人の心遣ひと苦勞と察すべし奉公人ゝ主人の氣を知らざれども主人の方でゝ奉公人の行末を案じて彼をアヽして是をカウしてと常に苦勞の絶る間なく又た縱ひ九尺二間の小店を出させるにしても其資本ゝ容易な事にゝあらず早く云ッて見れゞ奉公人ゝ主人の爲めに奉公し主人ゝ奉公人の爲めに奉公し又た奉公人ゝ身の爲めに奉公し主人ゝ家の爲め先祖の爲めに奉公するなり然るを奉公人ゝ兎角に己れ一人が奉公して居るやうに思ひ何につけ斯に附けて不足らしく云へども若し我身代となつてソレ米だヤレ薪だソレ衣服も斯うせねばならぬヤレ家屋も彼せねばならぬと云ふやうな場合に立至ッてゝ中々一通りや二通りの事で

行くものにあらず其時ハァ、主人の家に勤めて居ッた時ハ結句安心であつたが今ハ大變な苦勞の種を設けたと云ふ事を始めて知るべし注意せずんばあるべからず併し斯云へばとて一生涯主人の厄介よりつて居るのも餘り氣の利かぬものゆゑ其處ハ臨機應變の事にすべきなり

◎一事一業を貫くべし

昔し某處に二人の信心者あり甲ハ天滿宮を信仰し常に其神影を守り袋に入れて首より掛居れり又乙ハ同じ信心者にても氣の多き質ゆゑ諸神諸佛何にても手當り放題に皆な守り袋へ入れて所持したり而して或時に此二人が朝早く起出で旅行するの際途に四五人の盜賊あり拔刀を振廻して恐赫つけ何の苦もなく乙の男を剝取りて丸裸よし又た甲の男に取掛らんとする時不思議にも守り袋より天滿宮忽然と出現れたまひ彼の盜賊を追拂ひ給ひけれバ盜賊ハ皆恐れて逃失せたり是に於て二人とも辛き命を助かりしが一人ハ剝取られ一人ハ天滿宮の御利益にて少しの障りもなく二人同道して歸りたり既にして剝取られたる彼の男ハ誠に忌々敷おもひ首に掛けたる守り袋を矢庭に放り出して曰くコレ此中に御坐る諸神諸佛よ能く自己の云ふ事を聞ッしやれ隣家の男ハ只天滿宮ばかりを信心してさへ急難を免れしに此あたの神佛が僅か天滿宮の一神よりも及ばぬとハ何たる活智のあき事ぞと罵れハ守り袋の口自然とひらけて諸神諸佛悉く現ハれ出で異口同音に宣ひけるハ汝ぢ己れの愚かるを棚へ上て我々を恨む勿れ抑も汝ぢハ平生信心淺く只氣の多きまゝ數多の神佛を僅かの守り袋に押こめ置しゆゑ今朝汝ぢが火急の難に當りしとき諸神諸佛皆々氣の毒におもへども平生汝ぢハ一神一佛に信心ぶかき事ハなく只手當り次第に我々を守り袋へ入れし事なれバ誰あつて別に一働きと思ふ神も佛もおく先づ貴殿が出て此難儀を救ひたまへイヤどう致して拙者よ

りん貴殿の方がお馴染ふかき事ゆゑ先づ貴殿にお任せヤすなどゝ互ひに辭退して延引せしが斯く讓り合ふて居てん迚も果しあき事あれば然らば一同に出て救んとて各自に急いで守り袋の口を出んとすれば何がサテ神佛ん大勢あり出口ん小さし只ゴタ〳〵と揉合つて混雜して居る中に盜賊めん早くも汝ぢを丸裸にして仕舞ひしあり然れば此の以後ん餘りに我々大勢を頼まんよりん隣の男の如く只一心ゑ一神一佛を信仰すべし一神一佛なれば守り袋の出入りも早く身の働きも致し易し大勢にてん辭退の挨拶に隙が入て相談の極るまでが中〳〵捗取らぬゆゑに火急の間にん合難しと云れたと云ふ話しあり此話しん誠に詰らあい話しの樣あれども能く〳〵味へば世の中の事是れに鑑むべき事甚だ多し例へば學術技藝の如き或ひん商工業の如き其他何事を爲すにも限りあるの智力を以て限りなきの万能に達せんとすれば却て終身を誤るものなり故に只一事一業たりとも熟心を根據として之を貫かん事を志すこと肝要あるべし

◎多辨の一針

人間に口あるん言語を發し飲食をあす爲の道具なり若し人にして言語を發せず飲食を爲さゞれば口あれども陶器の片口ゑ異あらず然れども何事に限らず大抵ほどのある者あれば餘り饒舌り過ぎ餘り食過ぎれば折角調法に持て生れた口が却ッて禍ひの門とあるべし往昔ある處に一人の男あり此男ん何事にも尾に鰭をつけて無暗矢鱈と大業に觸れ散すの癖ありしが一日亡父の年回をいとなむとて數多の客を迎へしとき上坐にあはりし老人の物語りに今日の佛ん愚老が幼少よりの親友にてありしゆゑ能く平素の人と爲りを知り居れど此人ん若き時より放蕩じみたる事などん毫しもなく誠に勤行篤實にて世に得難き人なりしが不幸にして短命ありしん返す〳〵も惜むべき事ありとて頻りに生前の行蹟を賞しけれん主人ん此老人が亡父を追惜する

の尻馬に乗り例の大業に尾に鰭をつけて父の言行ゝ云々なりと述るにぞ一坐の人々ゝ皆感服せりッコで以て主人ゝ益々其調子に乗り扨て我が亡父が世間の人に優りしとヤすゝ第一若年より色欲を絶ち年終るまで一婦人にだも近付れし事一度もなかりしが是し諸君方を始め世間の人々が迎も爲し得べからざる事で御坐ると云へゝ其傍らに在りし一人眉を顰めて主人に向ひ御主人よお話しの中でゝあるが一寸伺ひ度只今お話しの御様子でゝ貴君ゝ御養子と存せらるゝが何歳の頃に何方より御當家へ御出ありしぞと意外の質問に主人ゝ驚き是ゝ異な事のお尋ね僕ゝ素より養子あるどの氣の利ぬ者にゝ之れなく諸君も御承知の通り先刻より御話しヤす勤行篤實の父が血脈の實子で御坐ると少し中ッ腹にてのべけれゝ其人大いに笑ッてイヤ僕も是まで左様に存じ居りたれど只今貴君の御話しを承まはるに御親父ゝ若年より一婦人にだも近付れし事一度もなしと仰せられたり然るに其親父に貴君の如き御實子があるとゝ是亦た異な事に候はずやと一本釘を打たれて流石の主人も赤面したりと云ふ話しあり故に人ゝ只善事にも悪き事にも凡そ程と云ふものを守らざれゝ所謂る鼠負の引倒しとて其人を賞せんとして却ッて其人を傷け我身を擧られんとて却ッて誘りを招く事往々にして是れあり慎まざるべけんや或書の中に云へるあり曰く世の人々金銀の出入ゝ大切なりと知れど言語の出入を大切にする事を知らず是を如何にと云ふに金銀の出入を粗末にすれば忽ち身代の害になる事を知れば猶ほ言語の出入を慎んで大切にすべし言語の出入を粗末にして身を亡ぼし家を失ひし者古へより數多ありと實に然り古人曰く事の至近にして繫る所ろ至大なる者ゝ言語飲食に過るなしと世のお饒舌り諸君少しく反省する所あれ

◎物小なりとて侮るべからず

奈良の大佛ハ大なりと雖も一佛の隨從する者なく淺草の觀音ハ小なりと雖も二王の門番あり糸瓜ハ大柄と雖も只ブラ〳〵として日を送り山椒ハ小粒と雖もヒリヽと辛く辨慶の勇ハ牛若の才に及ばず清正の武ハ秀吉の智に如ず是を以て人肥たるが故に貴からずの語あり大勇惣身に智惠がまはり兼の句あり大ハ小を兼るの便ありとハ云へお玉杓子ハ耳搔の代用を成さず櫨木豈に小揚枝の代りに用うべけんや然れば物の役に立と役に立たざるとハ其形の大小によつて分つべきものに非ず然るに古來の習慣として兎角に大なるものを重んじて小なる物を輕んじ蚤虱を捻り殺すハ何とも思はずして犬猫を殺すと云へば顔をシカメルとハ抑〳〵何故ぞや尤も昔し毛唐人國の宣王と云へる人でさへも牛の死地に就を見るに忍びずして羊を以てこれに易よと命令を下せし位なれば同じ命を取るにしても大きな物を殺すよりハ小さき物を殺す方が感じの薄きハ素より人情の常なるべしと雖も凡そ造物師が萬物を製造せらるゝにおいて禽獸蟲魚その他百般の事〻物〻其形ちの巨大なると微細なるとに拘はらず何一ッとして無益な物ハなき筈にて例ハ甲の事に用ゐて毒となる物も乙の部に用うれハ藥となる物あり或ひハ彼に於てハ害となるも此れに於て利となる物あり然れば其形ちに大小ハあれども其利害得失に至ッてハ皆同一にて只その用ゐ方に因て利ともなり害ともなるハ自然の理合と謂とざるを得ず果して然らば物の大小に因つて其愛憎を異にするとハチト分らぬい話し況んや小なる物にして其効力の却ッて大なる物に勝るもの多きに於てをやイヤ其樣なに何も本氣になつて理屈を並べる程の事ハ無けれど併し物の筋道を云ッて見ればヤア〳〵其樣なものにあらずや而して道人が又た何に感じてどう云ふ譯で此の如き寐言を吐くかと云ふに他なし近來の説に燕ハ諸作物の毒蟲を除き去るに効ありとて或る縣〻にてハ捕燕の禁令を發せられたりとの事なり

此説をして果して信ありとせば燕の名譽と幸福ゝ此上もなき次第にて彼の燕雀〳〵と其身の小なるを侮ッて無暗に輕蔑したる我〳〵こそ却ッて無用の長物たるを恥づべきなり易に曰く積善の家にゝ餘慶あり積不善の家にゝ餘殃ありと今燕に於て之れを知る而して他の禽鳥および人類社會に於て此の餘慶を得るもの果して幾許かある鑑みざるべけんや

◎芝居を觀て理屈を云ふ勿れ

この頃ろ歌舞伎座の葛の葉を見て感心した或人が藪から棒をッン出したやうに突然と道人に問ふて曰く狐が人に化て數年の間人間の女房となり剩さへ人間の子を產だとゝ何だかチト請取りにくい話しなれど昔しゝ斯の如き奇妙奇手列妙不思議の事もありしものなるや否やと道人これに答へて曰くなるほど御尤もなる御不審なり蓄生の身として万物の靈たる人間に化たと云へゝ實に奇々妙々不可思議千万の事と思ゝるれども演劇の中にゝ此等の類ひ甚だ多く畜生ゝ扱おき未だ不思議なのゝ櫻の木が人間に化た事もあれば柳の木が人間に化た事もあれど是等の事ゝ全たく其樣な事がありしものやら又ゝ跡形もない事を眞らしく作爲たるものやら其邊の處ろゝ道人も確とお答へヤし難し併しながら今でも吉原や洲崎へ行けば人間が狐に化たり或ひゝ猫に化たり或ひゝ牛に化たり或ひゝ馬に化たり或ひゝ狸と化る者もあれゝ廊下鳶と化る者もある處ろから考へて見れば彼の葛の葉とても万更形のない事でも無からうかとも思へる然が何に致せ道人ゝ其樣な無益な事を穿索するのゝ大嫌ひな性質にて縱ひ狐が人間に化やうが人間が狐に化やうが芝居ゝ芝居狂言ゝ狂言として見れば面白味もあり樂しみにも成るものと獨りで承知して居るなり然るに人によると芝居ほど世に馬鹿氣たものゝ無い大雪と云ッても只バラ〳〵と頭の上へ降るばかり雷と云へば樂屋でドン〳〵

と太鼓を叩いて居るお負に下駄を穿いた儘で座敷へ上るかと思へば庭の眞中へ眞面目な顔をして坐ッてけつかるイヤハヤ呼口ヤおい味噌も糞も滅茶苦茶だおどゝ下らおい屁理屈を云ふ人あれど味噌も糞も滅茶苦茶で詰らないと思ふおら何にも錢金を出して見物に行ぬが宜しい道人の目から見ると芝居を見て味噌も糞も滅茶苦茶だと云ふ誤當人こそ即ち味噌も糞も滅茶苦茶の先生おり故に君も葛の葉の狐がどうの斯のと其樣な無益の穿索ゝ後廻しにして夫よりゝ我身の化變る事を顧み給へ諺ざにも變り易きゝ人心と云ふ通り心も變れば姿も變る人間の化變るゝ恰かも猫の眼玉の時〻刻〻に變るが如く七面鳥の頭の色〻樣〻に變るが如く其中に又た盛衰と云ふものもあれば榮枯と云ふものもあり又た光陰の立のゝ鐵砲玉の飛よりも猶ほ疾く昨日の小町も今日ゝ梅干婆と化變り昨日の業平も今日ゝ干大根爺と化變る左れば其の梅干や干大根見たやうに化變らざる前に同じ化變るにしても兎角人の風上に立つやうに上手に化變る事を務むるが肝要なりと云へば其人澁い顔をしてモウ其邊で一服と仕たまへ餘り饒舌ッて居ると仕舞にゝ化の皮が顯れるからと云ひおがら大口を開いて欠伸を爲る道人おもとず其顔を見れば忽ち化變ッて二十五座の怪面の如し

◎鏡の話し

道人この頃一日の閑を得しゆゑ或る知己の家を訪ひしに生憎主人ゝ不在にて只幽靈然たる細君と赤鬼乎たるお三どんと外に兒猫一疋のみ素より遠慮すべき家にもあらざれバズット奥の間へ通りて四方山の話しに時を移し不圖その傍らを見れバ昔しの鏡一個あり察する處ろ今細君が磨き粉だか打粉だかをつけて磨きあげたる樣子なり道人これを見て大層結構お鏡ですねへと終においお世辭を云へゝ細君ゝ何とおく誇り顔ててお君「ナニ碌おお品でゝありませんけれど近頃ゝ皆

お硝子で出來て銅の鏡ンモウ是から先ン出來ませんから此樣お粗末な品でも大切にして居ります道人「左樣この節ン硝子と云ハ調法お物で安く出來ますから當節の子供おもちゃ鏡と云へバ皆お硝子で製造へるものと思ひ銅の鏡を知らない者がイクラもある位ですから昔しの品ン成たけ大切にお仕おさい細君「昔しン鏡の事を婦人の魂ひと云つたもので御坐いますが今でハ世の中か開化したとか何んとかて其樣お馬鹿な事を云ふものハ一人もありませんねへ道人「それだから困るのですテ昔しだからとて今だからとて鏡の製造へ方こそ替れ顔や姿の寫るのハ同じ事ですから女に限らず男でも矢張り鏡を魂ひとして居れバ間違ひの無いのですが夫れを唯顔や姿を寫す道具だとバかり思つて居るから困ります細君「へーさうですかねへ全体鏡の事を魂ひと云つたのハ何う云ふ譯で御坐いませう何うした譯と聞れて道人ハ得たり顔、横にうねつた獅子ッ鼻を無理遣りにビコ付かせて道人「是にハ中々深い意味のある事です一寸つまんでお話し申せバ鏡ハ元と鑑みと云ふ言葉を縮めたもので早く云へバ此鏡を見て我身を振り返り見よと云ふ事で御坐います古歌に「心をバ鏡に寫すものおらば曇や姿の見にくかるらん」又た「よしあしの寫る鏡の影法師よくよく見れバ我が姿おり」と云ふ通り凡そ世間の人と交ハるに此方で丁寧にお辞儀をすれバ先方でも丁寧にお辞儀をし此方で手を振りあげて怒れバ先方でも手をふり上て怒り此方で機嫌よくニコ〳〵笑へバ先方でも機嫌能くニコ〳〵と笑ふのハ丁度鏡に向つて我が姿を寫すのと同じ事で人が怒つたり怨んだりするのハ人の惡いのでハ無い皆な此方の心にあるのだから能く氣を付けおけれバ成らぬと云ふ處ろから鏡は人の魂ひと云つたもので御坐いませうと云へバ下女は傍から口を出して妾が在所の和尚さんも其樣お事を云はしッたァけが旦那さんも彼のときに居さッしやいましたかとハ實に近頃の一笑話おりし

◎遺言の事

遺言といふ死際に臨んで跡片附の事を委敗言ひ遺し又い書置事なり、遺言だの死際だのと云へば御幣擦ぎの人い、ヤヽ延喜の悪い鶴亀〳〵と身ぶるひを成さるか知らないが、イクラ延喜が悪くッても生あれば必らず死あるものあれば、死際に臨んでい此遺言か至極必要のものあり、ナセあらば我々共のやうあ一文無し素寒貧いどうでも宜が、凡そ中等以上の身代を持て居る家の主人が若し何にも言はぜに其儘默止て死で仕舞ときにい、其跡に殘ッた兄弟姉妹が各自に慾張根性を出して、兄は兄で丸取に去やうと思ひ、弟は弟で横取を仕やうと思ひ、又た姉い姉、妹い妹だけに夫々胡麻化さうと思ひ、又たヒョット親類中に悪い漢でもあるゝと此奴も色々あ悪課計を去て横合から掠奪りに掛ると云ふやうな事になると、折角先祖から代々汗水を垂して拵へあげた身代も、夫か爲に滅茶〳〵にあつて誰も彼も蚍蜉取らずに成るが如きは隨分世間に例しある事あり、故に能く其様あ事のないやうに先づ慥あ親類を証人に立て、夫から相續い兄にさせるとか、又は兄に家名を續せべきが順當あれども兄は甚六ゆゑ弟に相續をさせるとか、又は男子のあい人は是々斯云ふ者を娘の聟にして何するとか或ひは甲家乙家に何程々の貸金かあつて甲家乙家から何程〳〵借て居るゆゑ是をカウして彼をアヽして、夫から總領の取分か何程〳〵で二男三男姉妹には何程〳〵ッ分て遣る、夫から女房には別段斯して妾い云々するあ三どんを孕ましたのい斯云ふ處分にして若し赤ン坊が生れたら何すると云やふうに、何から何まで事明細に書て置ば、其書た物が口を利ゆゑ當人が死た跡でも決して酢だの蒟蒻だのと云ふ悶着の起る氣遣ひあし、尤も是は死際には限らぜ、元來人間と云ふものは老少不定にて、年を取たから必らず死ぬ若いから必らぜ死あいと云ふ譯もなし、イクラ若くッても無常の風に吹るれば赤ン坊の中に死ぬものもあれば、又イクラ年

を取て梅干の化物見たやうに成つてもピンシヤンとして居る者もあり又た昨日まではピンシヤンして打殺しても中々死さうも無かつた者が今日にあつてポクリと俄かにお陀佛となる者もあれば、斯く成ら ぬ前即はち平生に能く氣をつけてナヤンと跡の處分法を書て置がよろし、殊に當節の人間は義理も人情もなんにも無い兄弟は他人の始まり處か間が宜かつたら親父の天窓でも毆倒して懐中の金を持て行兼ねない時節あれば猶ほ更氣を附た方が宜しかるべし決して延喜が惡い杯と打棄置て死後に罪人を作る勿れ

◎命の洗濯

泣て暮すも一生笑つて暮すも一生といふ何の何兵衛が云つたのか知りませんが成ほど旨い事を云つたもので夫に違ひありません斯云ふ道人だからとて矢張り人間の仲間中なれば只毎日憎まれ口ばかりを筆書廻して諸君に澁い顔をおさせ申すのが自慢と云ふ譯でもありませず又た諸君に於ても惡口を聞て苦笑ひを成さるばかりが本意でもありますまいから互ひに打とけて命の洗濯と出掛けませう然が命の洗濯といふ至極六ケ敷事で之れを理屈家に云はせましたら謂ふべくして行あふべからざる事だと一本遣られるかも知れませんがマア其樣な野暮な事を云ひ給ふな命の洗濯よりも未だ六ケ敷い魂ひを入れ替ろと云ふ人さへあります然れば命の洗濯といふ氣保養の事だ魂ひを入れ替ろといふ了簡を改めよと云ふ事だと世間並の早呑込みに願つて置て扨て洗濯の種は何かと云へば此節流行の緣かいな節の唄であります然も道人の新作あれば之を謠ッて陽氣に一ッ遣て下さい

○新聞紙　**ひらけ**行く世の其中に、一際目だつ新聞紙、皆な御國と人の爲筆が取持つ文かいな

○よし原　いつも全盛よし原の茶屋の二階の大一座、勝た負たの爭ひは、酒が取持つ拳かいな

○うちみ　男心とあきの空、變り易いと知りながら、待ぞ暮せぞ便あく、苦勞ゑたゞけ損かいあ

○夕だち　サッと降來る夕立に、他所の軒端へ駈込で、序に借る煙草の火、是も多少の緣かいあ

○學校生徒　毎日通ふ學校に、習ふ讀書おこたらず、いつも試驗に及第ん、ふだん勉强の功かいあ

ト遣つて見た處ろで諸君ん面白いか知らあいが道人ん些とも面白く も可笑くも何んともありませんナぜ面白くあいかと云ふに鵜の眞似をする鴉で此樣な眞似をする事ん仕たが實際謠ふ事を知らないからであります譬へゞ千万卷の書を讀盡すとも之を行ふ事を知ら無けれゞ何の益にも立あい樣なもので折角愉快を感じる流行唄を作ッても實際謠ふ事を知らなけゞ其愉快を感じあい筈でありますす故に自分の武骨を引合ひに出して兎や角と云ふ譯でんありませんが總て世の中の事ん何に限らず口の先きや筆の先きよりん先づ實際に行あふ事を專一に仕あけれゞ成りませんオット其樣な小理屈を云ふか約束でん無かつたッけ、テッンシャンおやかましう……何だ狂人じみた

◎商人の懸引

商人には是非懸引といふものが無くてはならぬ商人に懸引のあるは取も直さず軍士に軍略あり政治家に政畧あり坊さんに方便あり女郎に手管あると同じ事にて若し商人に懸引なければ旨い汁は吸へざるべしと雖も併しなから同じ懸引でも凡そ世間並の懸引と云ふがあるものにて餘り懸引が過ると却つて品物を賣そこあひ或ひは信用を失ふ事あり例へは爰に一個の代物あり客これを購求んと欲して客「これは何程いたしますか亭主「へイ夫は是非二圓五十錢に願はあければ成らあいのですが二圓四十錢までに働らいて置きませう客「ハー二圓四十錢とは隨分安くあい品物だ夫では何れ考へて見ての事に仕ませう

と一も二もなく將に去んとす亭主は之をとゞめて亭主「如何ほどの思し召しで御坐いませうか客「さうさ一圓二三十錢位ゐなら買て行ても宜、と思つたのだが餘り直段が相違するからと云ひつゝ又去らんとするを亭主は再び之を止めて亭主「宜しう御坐います夫ぢやァ一圓三十錢で願つておきませうと云ふやうな商ひをするものあり何ぞ夫れ出鱈目の甚だしきや夫も大道に莚一枚の青空商人なら兎も角もの事あり縱ひ九尺二間にせよ一軒の店を構へて是から世間の信用次第で大丸越後屋とも肩を並べやうと志ざす者か二圓五十錢の品を一圓三十錢に負て賣るやうな無鉄砲な懸引をしては却つて信用を失ふの基ゐなりナぜならば一寸かんがへて見ると二圓五十錢の品を一圓三十錢で買た客はァゝ大層安直かつたと喜びさうな者あれど餘り負やうが、甚だしい處から客は疑念を生じてハテナ二圓五十錢と云ふのを一圓三十錢に附たら速かに負たがシテ見ると一圓にしろと云つても負たか知ら八十錢に附ても負たのかも知れんァゝ馬鹿〳〵敗ツツカリ直を附て飛でもない高い物を買被つたモウ此後あんな劍呑な店へ懸り合ふべからすと思ふは吾人共に同情なるべし故に商人には縣引が必要なりとは云へ斯の如き出放題の縣引はアンマリ感心仕つら寸左れば乞て又た餘り頑固に搆へて一厘も引けませんと澄し込で居るのも愛嬌が無さ過るなれとも併し縣引の過ぎるよりは未しも頑固の方がツマリ勝利を得るに相違ゐし世の實業諸君は如何ゐはし召やトは云ふものゝ縣引と法螺とは何に附ても今日の流者物ゐれば需用者も亦た注意して買被を爲す事ゐかれ呵々

◎商業家に改良を望む數件

道人は諸君も御承知の通りイヤ中には御承知のゐいか方もありませうが何に致せ名前からして骨皮道人實は食ふや食はずでヤット是まで婆婆の綱渡りをして來た位の哀れ果敢なき可哀想ゐ男でありながら

ら堂々たる商業社會へ横槍を入れて酢だの蒟蒻だのと生意氣な事を並べ立るとは是が世に云ふ盲目滅法恰かも雨降後の蚯蚓が見當違ひにノタクリ出して我知らずに小便壺へ墮落るが如き有樣ではありますけれども併し此生意氣な事を饒舌繰のも盲目滅法界にノタクリ出すのも素より道人の持前ナニ持前ばかりでは無い職業だから仕方がありません故に道人の云ふ事が若しお氣に障るならば額に蕁菜筋を出して細君の横ッ面をポカーンと一ッお毆打成さらうとも親父さんの兀天窓へコッーンと一ッ拳骨をお飛し成さらうとも其處は諸君の御勝手お氣任せとして置て道人は折角思ひ附たもので有りますから饒舌るだけの事は遠慮なく饒舌る積りで御坐います……イヤハヤ厄介な演說者だアハヽヽヽ（ヒヤ〳〵謹聽〳〵）ヒヤ〳〵といい有難い此勢ひに進入でエヘンと一ッ他所行の咳拂ひをしてソコで以て笑隊イ耳糞をホヂクレーと號令をかけて夫からソロ〳〵と申し述るでありませう（謹聽〳〵）扨て諸君よ道人は素より宗旨違ひの人間でいありますけれども岡目八目と云ふ八ッ目鰻見たやうな眼玉を以て今日の商業社會を見渡すに彼の人は商法にかけては拔目が無いの或ひは目から鼻の穴へ飛拔るほど金儲けが上手だのと云へど其商法に拔目がない金儲けが上手だと云ふのい眞に商法に拔目が無いのではなく又た金儲けが上手なのではない即ち虛言を吐のに拔目がない人を欺すのが上手だと云ふのであらうと思ひますト云ッたらナゼだナゼさう云ふかと一ッ疑問が起りませうが道人は此疑問に對して十分の說明を致しませう……諸君よ例へば此處に一個の賣物がある人あり其直段を問て曰くモシ御主人この品は何程致しますかと主人答へて二圓或ひは貳圓五十錢と云ひますソコで又た客の曰く二圓では高過る八十錢位にい負らないかと……處で三圓の品を半額にも足ない八十錢に附たから主人は少し中ッ腹で馬鹿野郎め面を洗ッて來いと云度さう

な顔付だが其處は商賣に負ろと妙な處へ堪忍袋と縛りつけてゝゝと松王笑ひを仕ながら八十錢とは餘り齟齬ひが甚う御坐いますがモウ少し御奮發を願ひます折角御覽に入れたものですから大抵あら我慢をして願ひますとの口上をキッカケに難だの艱だのとグズ〳〵云ッて夫からトウ〳〵一圓か一圓二三十錢に負て仕舞ますナント諸君是が純粋の商法と云へませうか尤も是は殘らず爾と云ふのでは在りませんけれども先づ中通り以下の商人は大抵この主義を取て居るやうに思はれますヒヤ〳〵ソレ御覽じろ實際一圓か一圓二三十錢で賣るものを二圓だの二圓五十錢だのと出放題な事を云ッて旨く行たら一圓の品を二圓に賣附やうとするものは取も直さず人を欺す事を主義として居るのでありませう故に道人は目下の商業家に向ッて第一番に改良を望むのゝ此懇直を云ふの弊害を止て貰ひ度ので御座います(ヒヤ〳〵)夫から又た商賣に依ては切手と唱へて品物の預り切符を出す事がありますは是は誠に便利な方法で他へ進物なぞには至極輕便で宜しいソコで其切手を出す家では品物を出さずに金を預るのだから取も直さず人の金を無利息で借て融通するのでありますは然れば其切手を持て品物と引替に行たときにゝ其金利として少しは品物を負て置ても宜位なものだのに切手を持て行と何か品物を只でも取られるやうに思ッて甚だ御機嫌が宜しからざるのみならず或ひゝ現金よりは品物を少なく寄越家などが有りますが是も一ッ改良をして貰ひ度と思ひます(ヒヤ〳〵)夫から是も亦た家に依ますけれども例へは一錢に三ッの品なら十錢買は三十あるべきが當り前猶は此方で慾張て云へゝ金高ののぼる程十錢に付て一ッや二ッ宛ゝ負て呉ても宜、道理だのに却ッて其數を誤魔化して十錢の割よりゝズット少なく寄越家などがありますが是も一ッ改良をして貰ひ度ものと思ひます(ヒヤ〳〵)夫から又た家に依ると御亭主と山の神オット失敬内儀さんとで

品物の高い安いや多い少ないなどの事が有りますが是も同じ一軒の家で其様な不同があつては甚だ不都合イヤ此様な事までお世話を燒て居た日又は中々一日や半日の事でゝ世話が燒きれませんから先づ此位にして置て跡は追々と申しあげる事に致しませう……失敬(拍手喝采)

◎子供衆のれ耳を拜借

追〻世の中が開けるに付て此節ゝ子供衆の演説が太層流行すると云ふ話しを聞ましたが是ゝ誠に結構な事で道人も蔭ながらヒヤ〳〵と賛成を致しますソコで道人も其のお仲間入りをして演説の眞似を一ツ遣て見やうと思ひますから若しお聞がありましたら一寸お聽下さい

◎ユヽ或時に蚤と虱が琉球疊の上で出會はした處が蚤ゝ素より歩行のが早ものですから虱のグヅ付て居のを馬鹿にしてオイ虱公お前ゝ歩行のが大層上手だがナント自己と一番駈ッ競をして見様ぢやないかと云と虱も負ない氣になつて宜しい夫ぢやァ此處から三間向ふの疊の緑まで駈ッ競を仕やうと約束を致ましたソコで虱ゝノッリ〳〵と這出しましたが蚤ゝ元〻虱を馬鹿にして掛ッた事でありますから些とも一所に駈やうともせず彼樣なにグヅ〳〵して居のだから彼奴が半分過行た處でソロ〳〵出行ても追附るとスマシ込で見て居中にツイ眠氣がさして來てトロ〳〵と一寢入致しました然が虱の方でゝ彼奴に馬鹿にされたのが殘念だと思一心から一生懸命に歩行て何か斯か疊の緑の一二寸前まで漕付た頃に蚤が目を覺して見と虱ゝモウ八九歩通り行て居るから此奴失敗たと思つて夫から此方も一生懸命にあつてプイ〳〵と飛出たが何に致せモウ九歩通まで行て居る處へ跡の方から出掛たのでありますからトウ〳〵虱に負て仕舞たと云ふ話しがありますが學問をするの

も矢張この通で縦ひ何様なに利口で物覺えが宜ても夫を鼻に掛て怠けて居てゝッマリ物覺が悪くても平生怠りなく勉強して居る人にゝかなゝ無いやうよ成ますから能く氣を附なければ成ません（ヒヤ〳〵）ヒヤ〳〵とゝ有難い……夫から最一ッ今度ゝ無筆の話しを致しませう（謹聽〳〵）マア其様なに愚弄たまふな

●ある年の暮に一人の男が主人に命令られて甲藏と云人の家へ鴨を一羽歳暮に持て行ます時にてうど路の順が宜からと云ので其路の乙平と云ふ人の家へ手紙を持て參ました爾すると此の乙平さんゝ小兒の時に手習を仕なかった人でありますから何の手紙やら分りません尤も平生ゝ其息子の丙助と云ふ人が總ての用向を足て居るのですが此時ゝ生憎と其丙助さんも留守で困ましたが併し手紙位なものが讀ないと云ッてゝ使に對しても外聞が悪いと思ましたからズット手紙を開て讀るやうな風をしてハヽア成ほど是ゝ御苦勞

でした私しゝ鳥類が大好物で殊に美事な鴨を有がたうお歸りに成ましたらお家へ宜く云ッて下さい何れ其内御禮に伺ますと云と其使の人がイヤ此鴨ゝあなたのお家へ置のでゝありません是ゝ甲藏さんの家へ持て行ので貴方のお家へゝ其手紙ばかりで御坐いますと云れて乙平さんゝ飛でもない恥を掻たと云話しがありますが總て何事によらず知つた振をするのゝ甚だ善ない事であります又小兒の時から能手習ひをして置ないと年を取て此の乙平さんの様に恥を掻きますから其積で諸君もよく勉強を成さいませ（ヒヤ〳〵）

●某田舍の男が東京の薪炭問屋へ薪と炭とを持て參ましたソコで此田舍に住で居る人間ゝ男でも女でも殘らず馬鹿ばかりだと云ふ評判で其薪屋の主人も雇ひ人も其話しを聞いて居ます所から薪炭を持て來た男を大層馬鹿にして種々と思弄た揚句に其主人がオイ若い衆さんお前の住で居る田舍ゝ一人として利口な者が無て皆な

馬鹿ばかりが揃つて居と云ふ話たが本當かねと聞くと其の男が云ふにハ夫やアハア本當だアよ自己がの在所ハア皆お前樣ア見た樣お馬鹿野郎ベエ揃つて居るだアと云ハれて彼の薪屋さんハ一言の返答も出來おかつたと云ふ話がありますが成程自分が左程に利口でも無い癖に人の事を馬鹿だの白痴だのと云て居と仕舞にハ飛だ恥を掻ものでハ有ますから平生に能く氣を附べき事で御坐います

● 昔し辨慶が牛若に向つて大層腕力の自慢を致ました處ろ牛若の云にハお前が夫れほど腕力が強ければ今日お前と自己とで一升飯を潰して押糊に仕ッ競をして見樣ぢや無いかと云ふと辨慶の云ふにハヘン一升飯を糊に潰す位お事ハ朝飯前の仕事で御坐るサア遣つて見ませうと直に一升づゝの飯を持て來て板の上へ載せましたが辨慶ハ素より力自慢の人でありますから坊主頭へ鉢巻をして何だ此位お事ハ造作もない事だと云ハ無い計りに行成り杓子を持て一度にゴチ〳〵とこね初めましたスルと牛若の方でハ落附拂つて小さお篦で一粒づゝ〳〵ボチリ〳〵と潰し始めましたッコで其勝敗ハ何おつたかと云ふと牛若の方ハ根氣よく一粒〳〵に潰したのでありますから奇麗な糊が出來たが辨慶の方ハ一度にこねたゆゑ何時まで立ても飯粒が殘つて居てトウ〳〵牛若に負たと云ふ話しがあります然れば何事をするにも物の順序と云ふものを履ずして只早くばかり仕遂げやうと思ふと却つて失敗るものであります

● 一日支那人と日本人とが出會ましたときに支那人が自慢して云ふにハ僕の邦にハ昔し閔子騫と云つて髮の潤さが四間ある人があつた故に今でも之を傳へて珍らしい巨頭の人として居るが日本にハ其樣お人ハあるまいと云ひましたスルと日本人も負おい氣におつて何んだ髮の潤さがタッタ四間ばかりあつたとて何が珍らしいものか僕の邦にハモット巨きお頭の人がイクラもある夫れハ誰かと云へば彼の

城を枕に討死をしやうと云つた赤穂の義士だと云はれて流石の支那人も閉口したさうであります然れば總ての事上に立つのあるもので有りますから僅か計りの事を鼻にかけて自慢したり威張ッたりするものでゝ有りません

面白叢談終

明治廿四年十一月廿四日印刷
同　年十一月廿[illegible]日出版

定價貳拾錢

著者　西森武城　淺草區藏前片町廿番地
發行者　谷傳吉　日本橋區本銀町四丁目九番地
印刷者　宮本敦　神田區小川町一番地
發行所　共隆會　日本橋區本銀町四丁目九番地